

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十六年二月廿日印刷納本
昭和十六年三月一日發行

第七卷 第三號

土 淨



三 月 號

大正大
學教授

大野法道

本會
理事長

中村辨康

關西大
學教授

前田聽瑞共著

淨土宗讀本

淨土宗の教義、信仰、歴史、實際！ 即ち淨土宗がその中に持つ凡てのものをだれにも解るやうに、しかも立派な體系のもとに説いたのがこの「讀本」です。著者は現淨土宗が誇る第一流の理論家と信仰家で、後世に残る定本とするために共力してなつた苦心練磨の結晶です。管長郁芳隨園貌下は序文を、金戒光明寺法主望月信亭台下は表題を進んで御染筆下された教界の指導的讀本です。三度び版を重ねてなほ足らざる賣行はまた本書の眞價を實證してゐます。

發行所 法然上人鑽仰會

東京芝區芝公園 明照會館
振替東京 八二一八七番

菊判四五〇頁・總クロース裝
本文五號 綴數 葉 入
定價 二圓五十錢
送料 二十一錢
(朝鮮・臺灣・滿州・樺太 四十九錢)

『淨土宗讀本』內容

第一編 歴史

第一章 釋尊の生涯

第二章 佛教の發達

第三章 法然上人傳

第四章 二祖から現代まで

第二編 教義

第一章 淨土の教義

第二章 信仰の對象

第三章 西方の淨土

第四章 信仰の獲得

第五章 念佛の意義

第六章 信仰の生活

第七章 念佛と日本精神

第三編 實踐

第一章 生活要素としての念佛

第二章 信仰を方向づける爲の宗派と寺院

第三章 寺院の構成及び機能

第四章 信仰修養に必要な諸準備

第五章 信仰修養法としての行儀

第六章 人生の最大儀禮

第七章 祖先への報恩行

第八章 信仰増進の方法

新發賣

一日二球で健康量



肝油を精製した
純ビタミンAD

肝油が効くのはビタミンAとDの爲だと判つてゐる今

日、魚油のまゝの肝油で我慢する必要はありません。本品は肝油から精製抽出したビタミンAとDを無味無臭のドロビュール球に収めた快適な製品——肝油の効果は完全に数十倍に強化され且快適化されました。

合理的な新製品

新製品「理研ビタミン球」は、最近のビタミン學說に據り、一日二球づゝ服めば完全に生理的健康量を満たせる様に、一球ビタミンA五千D一千國際單位を含有させた製品。しかも青豆ほどの小球です。

一月量 六〇球 二圓

總代理店
株式會社
玉置商店
振替東京七二番

藥店にあり
品切の際は總代理店へ

理研製品

理研 ビタミンAとD 二球



浄土三月號 目次

表紙……………河村良孝

扉・目次カット……………中島保

時局より見たる 家庭と佛教……………柳原義光(三)

春 近 し……………吉田絃二郎(三)

因縁 實話 孝は、百行の基……………石橋徳作(六)

法然上人 和歌 註解……………安西覺承(四)

巡り院 金戒光明寺に詣づ……………北城生(五)

信

仰

相

談

……………中村辨康(一)

お饅頭のいはれ……………原田万吉(三)

大陸に志す人に……………渡邊明道(七)



歌

壇……與謝野晶子選……(三)

淨土まんが……(四)

俳

壇……太田耳動子選……(五)

會員遍信……(六)

實話 英

靈

船……中野隆雄……(六)

小説 瓢

簞……三宅連……(七)

法話 感話

一つ缺けたるもの……伊藤宏天……(八)

先師を
語るを

道重信教上人 増谷文雄

……(九)

佛敎
修養

お授戒の受け方……中村辨康……(十)

編輯

輯

後

記

……(十一)

淨土三月號目次

右京權大夫隆信筆 原本知恩院所藏

國寶

法然上人御影

堅壹尺四寸・横八寸
絹本寫眞
精巧典雅
十數度刷

!! 到殺み込申 少僅部殘

本會は創立以來、夙に法然上人の御眞影頒布の急務なることを痛感し、京都知恩院所藏にして畏くも後白河法皇の勅旨により、藤原隆信朝臣の筆になつた相好端嚴、筆致精巧を極めたる國寶「法然上人御影」の複製企劃を進めてゐたが、時恰も淨土宗青年會聯盟でも期せずしてこの議が起り、茲に一致協力してこれが作成に着手し、種々苦心の結果、完成を見るに至つたので、本會は早速全國の支部に配布したところ果然！一般會員よりの申込み殺到のため、更に偉大なる上人の御風手を普く同志とともに拜すべく、特にこれが實費頒布を斷行してゐるが、驚く程多數の申込に接し、既に殘部は幾何もない。

精巧無比!! 神々しき上人の御影は實に眞に迫るものがあり、常に上人の人格を景仰し、念佛生活を體味到せんとする同志は、此の際至急お求めの上、朝夕座右に掲げて恭敬せられんことを敢て奨む。

一葉實費 金 壹 圓 (送料不用)

所 込 申

法然上人 鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内

振替東京八貳壹八七番
電話芝(43) 一三五二・〇八四〇

淨土

三月號

まめやかに往生の志ありて、彌陀の本願を疑はずして念佛を申さん人は、臨終のわるき事は大方は候まじき也。そのゆへは、佛の來迎し給ふ事は、もとより、行者の臨終正念のために候也。

法然上人御法語





先師を語る：1

道重信教上人

増谷文雄

その一つは、博多の萬行寺の七里恒順和上に結びついた思ひ出です。

わたくしは、おさなかつた頃の大半を、九州小倉の知足寺といふ小さい寺ですごしました。小倉といふ市は、今日でこそ、北九州の軍需工業地帯の中心地として、殷賑と喧騒を極めてをります。が、そのころでは、至極おちついた、静かな、城下町のなごり豊かな町でありました。

そのころの、おさなかつた私の思ひ出のなかには、明治大正の名僧といはれる方々に結ぶつた二つの思ひ出がありました。それは、ほんの一すした、何でもない思ひ出なのですが、今日となつて見ると、わたくしにとつては、なか／＼貴重な思ひ出であると申さねばなりません。

七里和上は、明治三十三年かになくなられた方ですから、むろん、そのころは残せられた後のことでしたが、この和上が非常に力を入れて經營されてゐた龍華教校といふ學寮の學僧たちが、よくわたくし達の町内を、供養をうけて歩いてゐたことが思ひ出されます。學僧たちは、木綿の墨ぞめの衣の上に、首から前に「龍華教校」と書いた四角の箱をつるしてゐました。わたくしも、その箱の中に、父から貰つた何がしかの金を喜捨したことを覚えてをります。

後になつて、明治の名僧の傳記をしらべるに當つて、あの龍華教校の經營者が七里和上であつたことを知り、またその和上が、

「佛を拜まうなら本願寺へまあれ。法を聴かうなら萬行寺へゆけ」

と、言はれた程の名僧であつたことを知つた時には、その思ひ出を、本當に有難い勝縁だと、泌々思つたことでした。

二

もう一つの思ひ出は、道重信教上人に結びついた思ひ出でした。

それは、ある夏の、ひどく暑い日の夕方のことでした。私が、母と一しよに、本堂の前に出て、夕涼みをしてをると、一人の、見もしらぬ男が、門を入つてきました。

みると、随分みすばらしい身なりで、それに、ひどく疲れてゐる様子です。わたくしたちが、怪訝な顔をしてゐると、身なりに似合はぬ丁寧なおじぎをしてから、その男は、ぽつ／＼と話しはじめ

ました。

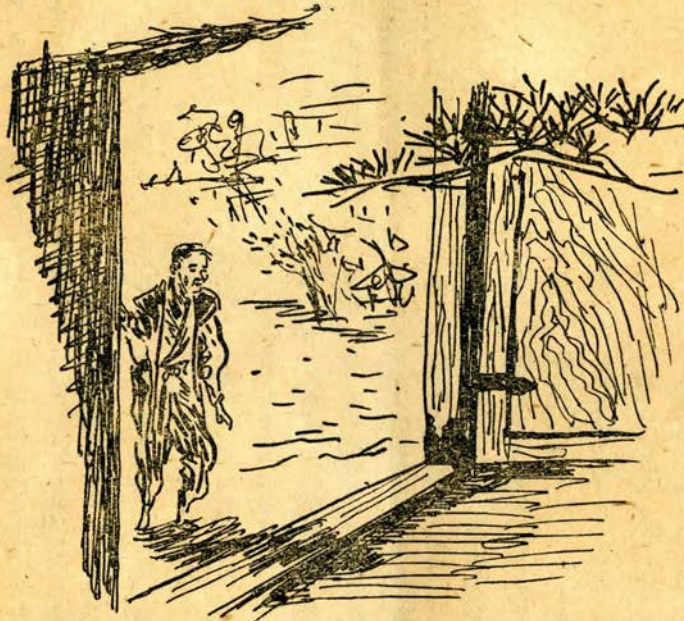
その話は、要するに、行きくれて旅費をなくして困つてゐるから、何がしかの喜捨を願ひたいと

言ふのでありますが、その話の中で、その男は、自分は宇部のものであるからして、滅多にうそごとは申しませんと言つたのを、私は今でもはつきりと記憶してをります。

だが、私にも、また母にも、宇部のものだからうそごとを言はぬといふ意味は解りませんでした。「なんで宇部のものならうそごとを言はないのかい。」

勝氣な母が、そんな具合に質すと、その男は、やゝ得意氣な顔をして、

「それは、宇部には、松月院に道重信教といはれる方があつて、この方の大きな感化によつて、うその



ごとを言つたり、盗みをしたりする者はないのです。わたくし

も、こんな見すばらしいなりをしてをりますが、うそことを申しては、和尚さまに申譯ないことを知つてをります。」

といふ意味の説明をしたのでした。私は、その説明をききながら、小倉から程遠からぬ宇部といふところに、そんな偉い和尚さまがあるのかと、いささか感にうたれた思ひでした。

だが、後に増上寺の法主として登場された道重僧正が、その宇部の和尚さまであつたことを知つた時には、更に更に深い感激にうたれたことでした。

三

道重僧正上人が、増上寺の第七十九世の法主になられたのは、大正十二年の七月のことであつたと記憶してをります。

御承知のごとく、増上寺といふと、わが浄土宗の四つの大本山の中でも、もつとも格もたかく、由緒も立派、伽藍も堂々たるものであつて、この寺の法主になられた方は、次には總本山知恩院に晋んで、管長として浄土一宗を統べることになつてゐます。だから増上寺の法主の選挙といふことになると、きつと激しい競争が行はれるのが例であつたやうです。

増上寺の第七十八世の堀尾大僧正がなくなられた時にも、また何人かの有力な候補者が現れて、はげしい競争が豫想されてゐたのです。ところが、渡邊海旭師や椎尾辨匡博士などの推薦によつ

て、宇部の松月院の住職たる道重僧正上人が、この選挙の競争場裡にかつぎ出された時、浄土一宗の人々は、啞然とし、茫然とし、やがて肅然として、それまでは出揃つてゐた候補者たちは、みなとそ／＼と退却してしまひました。

山口縣厚狭郡宇部村の松月院、それは名もない田舎寺でありました。明治の末年までは、松月庵と稱して、庵號を名乗つてゐたほどの粗末な寺なのです。その寺の住職が、大本山増上寺の法主の候補者として名のり出てきたのですから、なるほど啞然たらざるを得なかつた譯です。

しかも、その推薦者が、當時浄土一宗の善識として輿望をあつめてゐた渡邊海旭師や椎尾辨匡博士であることを知つた時、道重僧正上人の何ものなるかを知らぬ人々は、なるほど、茫然とするのも尤もでありました。

だが、やがて、道重僧正上人の何者たるかを知つた時、全浄土宗の人々は、肅然として襟を正さざるを得なかつたのです。そして、この上人を相手として増上寺の法主を争はんとする者は一人もなかつたのです。

かくて、道重僧正上人は、無競争で増上寺の法主に當選しました。片田舎の小さな寺の住職が、一躍して大本山増上寺の法主の地位に坐したのです。

世間の人々は、みな驚嘆の眼をみはつて、この上人を迎へまし

た。

四



この道重信教上人は、安政三年三月四日、長門國厚狹郡宇部村の道重十次郎の五男として生れました。

明治元年には、年十三歳にして、おなじ村の松月庵（のちの松月院）の小田信立上人について剃髪しました。

年十八歳のころ、浄土宗山口講學場に入り、二十四歳のとき、浄土宗大教校に進み、三十歳にして、師匠の後を嗣いで、松月庵の住職となりました。

その後、明治廿六年、卅八歳のころから、いまの大正大學の前身なる宗學本校の教授をしてゐた時代もありました。また、明治三十三年のころには、増上寺の護國殿別當寮をかりうけて、佛學院を創立したこともありました。この佛學院といふのは、専門僧侶以外の人々にも、佛教の智識を與へんとする趣旨のもとに創められたのですが、苦心經營、よく維持して、大正年間までつゞけてをられました。

だが、道重上人の生活の本據は、いつも宇部の松月庵に存してあつた。そして、松月庵の和尚としての、上人の學と徳とは、その地方の人々の仰望しておかざるところでありました。殊に、その言行の洒脱にして、飄逸であつたところから、一休和尚の再來のやうに仰ぎたつとされたものでありました。

つぎに、その今一休ぶりの二三を、開いたまゝ、讀んだまゝに、申しのべておきたいと思ひます。

五

道重上人は、檀家の法事に

おいでの節は、たいてい歩いて行かれましたが、時には、人力車を用ゐられることもありました。だが、人力車に乗つて行かれた時には、いつもお布施を、そのまま車夫にやつてしまふのが例でした。

ところが、ある時のこと、

例のやうにお布施を上人から貰つた車夫が、歸宅して封をきつてみると、何と五十圓の大金がつんであるではありませんか。今日だつて、五十圓のお布施といへば、田舎では、ちよつと例が少なからうと思はれますのに、それが明治時代のことですから、まるで桁がはづれてゐたと言つていふと思ひます。



あけて見た車夫は、肝をつぶして驚いてしまいました。で、早速、松月庵にかけつけて、上人にその由を申上げると、上人はにこにこと嬉びながら、

「それはなあ、佛さまが、お前の心がけに對して、下されましたお金ぢや。その心算でつかひなされいよ。」

と教へられました。

その車夫は、その金を資本にして、商賣をはじめて、後には、立派な商人になつたといふことです。

またある時のこと、松月庵に一人の訪問客がありました。その客の歸りのお土産にと、上人は、庵の境内にできた笹を、一束用意させました。ところが、客は、

「これをたゞで頂戴しては相濟

みません。」

と言つて、金をおかうといふのです。

「それはいらぬこと。寺にはたゞで出来た筈だから、たゞで差上げて少しもこまることはありません。」

「それでも、わたしの方で、氣が済まないから……。」

すると上人は、

「では……」

と言つて思案をしてをりましたが、

「それでは、一圓ほど頂いて置ませう。」

と申されました。そのころ、その位の筈なら、多寡が十銭か

二十銭のものであつたと思はれますが、人の好意を素直に受ける

ことを知らなかつた客は、上人から痛棒一本を喰はされたわけ

があります。

(追記)

「は、この「先師を語る」に於いて、わが宗の近代

道重信教師、渡邊海旭師その他の方々の

たいと思つてをります。これに

代名僧に關する資料を、少しで

るならば、私のこの上もない喜

事するものゝなかに少しでも誤

遠慮なく御注意をいたゞきた

るべき資料がありました節に、

敬助下さる意味において、是非

ます。筆者の現住所は、東京

ります。(齋藤 清畫)

陸海軍慰問 雜誌 淨土

寄附者芳名(敬稱略)

二圓四十錢 滋賀縣愛知郡 藤村 惠 道

二圓 愛知縣海部郡 源 空 寺

二圓 滋賀縣水口町 永 福 寺

一圓五十錢 奈良縣吉野郡 福本 キミ ノ

一圓二十錢 堺市大町 河 盛 秀 夫

十二圓 大分縣中三津市 神谷 壽 太郎

二圓 北海道上川郡當麻村 畑 楊 一

一圓 愛知縣新川町 松 枝 戒 應

二圓四十錢 東京澁谷區元廣尾町 越 智 正 子

一圓二十錢 臺灣臺灣州斗六街 楊 清 香

一圓八十錢 東京深川區清澄町 藤 田 清 香

三圓 朝鮮平北軍管館 石 倉 嘉 一

二圓 朝鮮新義州淨土寺 北 出 立 仙

一圓廿錢 松山市三番町 浦 田 多 喜 人

一圓五十錢 埼玉縣松山町 城 恩 寺 本 會 支 部

一圓二十錢 京都府龜岡町余部 原 圓 能

一圓 岐阜縣本巢郡鷺田村 林 香 寺

春 はる近 ちか

し

吉田 絃二郎

昨夜の嵐で裏の竹林の隅の柚子の實が十二三顆、
笹の葉の上に落ちてゐる。今夜は湯の中に入れて温
まることにしよう。

今朝はめづらしく淡雪が積つてゐたが、いつの間
にか解けてしまつた。冬になれば庭に下りたのじこ
が仔犬の食器を啄きに來る。仔犬はのじこを見ては
追ひかける。のじこは追はれてもまた犬の食器を啄
きに來る。しまひには仔犬の方が根負けして、犬小
屋に入つたまゝ小鳥をながめてゐる。仔犬にして
も、小鳥にしても、それぞれの魂を持ち、それそ
れの考を持つてゐるのであらう。なまじ人間を相

手にして自分の心を搔きみだすよりも、笹の葉の上
に轉がつてゐる柚子の實や、小鳥や、仔犬をじつと
見守つてゐる方が、眞實な生き方であるかも知れな
い。人間を相手に生きてをれば、孤獨の悲しみもあ
るが、小鳥や仔犬を相手に生きてゆけば人生つひに
孤獨といふことはない。

×

秋に裏の畑の黒い土を掘つて球根を生けて置け
ば、春の雪解を待ちかねて可憐な花は黒い土の中か
ら頭をもたげて來る。



花は無心といふ。しかし有心の人間以上の眞心を見せられる。花を無心といふのは當らない。一の愛情を投げかければ花も亦一の愛情を示してくれ。十の愛情を與ふれば花も亦十の愛情を示す。花は決して無心ではない。人間の言葉を語らないのみである。しかも花に對して靜坐すれば、言葉以上の言葉をささやく。

小鳥のゐるかぎり、花の咲くかぎり、人は決して孤獨ではない。

×

わたくしは年齢から言つても決して耳は近い方ではない。しかし山に登つて遠くの溪川の音を聞き取ることは誰よりも早い。また遠い山風の音や、山の奥の鳥の聲を聞くこともたいていの人よりは早い。初雪の深山を歩いてゐて、わたくしの耳には澤の駒鳥の聲がひびいて來る時も、同行の登山者の耳にはつひに響いて來ない。

同行者はわたくしの耳の力を疑ふ。錯覺であると思ふであらう。

人間は自分の知識、感覺の範疇の内のみ眞實を肯定する。そしてその範疇以外の一切を錯覺とし、迷蒙としてしまふ。虔虚な心を持して、狭い知識以上の世界にまで詣る修行を考へない。

わたくしの耳は決して人以上の聴力を持つてはゐない。しかしわたくしは人以上に小鳥の聲を愛する。人以上に溪川の音を、せうらぎの聲を愛する。その一念がわたくしに、同行の人々の聴き得ない小鳥の聲を聴かしてくれるのであらうと思ふ。

すべて信仰上のことはその人の實感もしくは體驗に依ることであつて、實感を持つ人にのみ究竟の世界は存在するのであつて、その境まで詣らぬ人にはたゞ概念として存在するのみであつて、何等の力ともなり得ない。

信仰は生きるか死ぬるかの問題である。昔から幾多の殉教者たちが命を賭けて信仰を守つた心を考へなければならぬ。

×

今朝は寢てゐる間から庭の四十雀の高鳴きであ



る。春が來たのだ。

四十雀は高い樺のいたゞきで高鳴きをつゞけてゐる。四十雀にも春の來たことがたまらなく嬉しいのであらう。追々にのじこもかしらだかも鶉も高鳴くであらう。やがて春の野に出て高鳴く小鳥らの聲を聞くことができるのだと思ふと胸がうづく。

×

戦争も五年目の春に入つた。

食糧問題もやかましくなつて來た。しかし物は考へやうである。不自由と思へば不自由だが、これが常態だとおもへば不自由ではない。

「足らはぬは足るですますぞ庵の春」で、足らはぬを常とおもへば忍ぶことも出来る。病氣をして部屋をあたくめるに炭が足りない時などは苦しいが、戦場に働いてゐる人々のことを考ゆれば何でもない。

いつたい私たちの子供のころに比べて今の世はあまりに足りすぎてゐた。私たちの小學時代には兒童の半分は補綴のあたつた着物を着てゐた。ランドセルなど見た者もなかつた。小學校でも一里や一里半

の山道を通つてゐた。中學になると三里四里の道を歩いて往復した。喰べ物にしても今日の戦時以上に代用食を攝つてゐた。粟、甘藷、きらずなどを入れたものが主食であつた。どんな寒中にも足袋もズボン下も穿かなかつた。羽織も着かなかつた。今でも故郷の人たちはさうであらうが、朝は眞冬でも眞つ暗な中に起きて馬を曳き出し、朝食前に一稼ぎする。そして日が暮れるまで働いて、夜は十二時ちかくまで縄を編み、蓆を編む。かういふ生活を つゞけて來た人たちには不自由といふものはない。

×

いつか歌舞伎座の稽古場で幸四郎丈と話しをしてゐる際幸四郎丈がこんな話をした。「私が初めて羽織を着て樂屋入りをするのができたのは十九の年でした。羽織を着た私の姿を見て私の男衆が泣きましたよ。人間は苦勞をしなければなりません。私はどんな不自由な世の中になつてもすこしも不自由などと思ひませんよ。」

名優松本幸四郎丈だけに一層この言葉をありがた



いと思つて聞いた。

わたくしの隣藩では三萬石くらゐの小藩であつた關係から、藩の士族たちは年中朝食は粥と決つてゐた。家中の人たちは何百年の間粥を喰べてゐたのである。朝そこの屋敷町を通れば家毎に粥をすすする音が聞えるなどと言はれたものである。隣藩の人たちは幾百年の間非常時の生活をつゞけたのである。

▽愛讀者の方々にお願い△

數界第一の發行部數を誇る本誌であります、他の營利雜誌のやうに澤山の人手を使つてやつておるのではありませんので、愛讀者の方々に於ても本部員の手助けをしてやると云ふお氣持で本部との聯絡には左の諸點をお守り下さるやうにお願いいたします。

◇振替郵便で會費等お拂込の節は裏面にある通信欄にご用向きを必ず詳細にお記入下さるやうにお願いいたします。何も記載してないのは誤りの因です。また不必要な勞力を費さねばなりません。

×

やがて日米問題が行くところまで行きつけばこの上の非常時になるであらう。しかし國民のひとり一人が山寺の修行僧の心構をすれば、時艱は克服されるであらう。

◇新入會の方は申込と同時に會費のお拂込みをお願いいたします。

(それには振替郵便が御便利です)そして「新入會、何月號より送れ」と御明示をお願いします。

◇いまだに代金引換で書籍等のお申込がありますが、代金引換郵便は既にありません故、御注意願ひます。端書のご注文も困ります。ご注文は一切前金で御願ひします。またその際送料をお忘れなきやう。

◇本會の振替番號は東京八二一八七番、振替用紙は毎號雜誌に添付してありますが、郵便局でも請求すればたいでくれます。

◇本部へのお問合せは必ず返信料つきで御願ひします。それでないといと返事致しかねる場合がございます。(係



因縁
實話

孝は百行の基

善・悪守衛の奇しき邂逅

石橋徳作

今からもう五、六年も前のことであつたら、議會が假議事堂の方で開會されてゐたが、本會議のあつたある日のこと私が書記官席からフト傍聴席の方を眺めると、そこに質素な身なりをした六十歳の老婆のつつしめやかに傍聴してゐる姿が目についた。この日も傍聴席は満員で、殊に婦人傍聴席には、貴族院である爲でもあらうが、皆何れも綺麗を飾つた絢爛たる服装の婦人達ばかりであつたので、派手やかなその席の中に見るからにゴツゴツした木綿の着物の老婆が一人混つてゐ

たために特に目に止つたのかも知れない。だがそれよりも更に一層私の注意をひき、この老婆を熟視させたわけは、その老婆の傍に一人の守衛が立つてゐて、しきりに老婆を勞つてゐる様子に氣がついたからであつた。そしてその守衛は老婆に對して、あの方は文部大臣であるとか、あれが何々公爵であるとか、優しく説明をしてゐるらしいのが、私にはたまらなく好ましく感ぜられた。私は如何にもこの守衛と老婆の姿に氣を引かれたので、その日の議會が散會してから、二人に私の部屋まで来てくれるやうに頼んでおいた。

やがて二人は私の部屋に来てくれた。その守衛は上田萬太郎（假名）と云ひ、議會開會中臨時に傭はれた守衛で、その老婆は矢張り上田の母親であつた。彼は守衛に採用されたのを機會に是非母親にこの議會を見せてやりたく思ひ、田舎からわざわざ／＼呼んだものであつた。老婆の服装は全く質素きはまるものであり、彼女の手が極いあかぎれで荒れてゐるのも毎日の勞務がしのばれるやうに思はれた。上田がああ絢爛たる服装の婦人達の中で、身なりの粗末な母親に心からの孝養をつくしてゐた先刻の様子が目にやきついてゐて

大いに感動させられるものがあつた。

やがて老婆が私に向つて

「斯様に私達をおまねぎ下さるのですしたら、少しは服装にも氣をつけて来るのですした。こんな見苦しい姿でほんとに失禮いたしました。」

とすまない事をしたやうな顔をして云ふので、私は

「いや——その着物の方が錦紗の着物等より餘ッ程宜しいので、立派な奥様たちの間にあつて後光が射してゐるやうに思ひました。お手のおかきれも、稲のもみをふる時に風にあつて出来たのだと思ひますが、その手をみると私も母親を思ひ出し、尊いものを拜見するやうに感じます。」

と答へた。そして更に上田が毎日この議會で立派に仕事をつとめ、他のものの模範であると賞めると、その老婆はほんとに嬉しうで、私に繰り返し繰り返し感謝の言葉を残して歸つて行つた。

やがてその年の議會も終つて、上田は守衛

の任務を立派に果し、故郷に歸ることゝなり、その挨拶に私の部屋に來た。彼は母親が



來た折の厚意を謝した後、自分の育ひたちについて次のやうに語つた。

彼が未だ二歳の幼児であり、彼の弟が生れたばかりの時に、不幸にして彼の父親はこの世を逝つたのであつた。彼の母親は未だ二十五歳の若さで未亡人となつたのであつたが、彼女は夫に別れたその時に雄々しくも二人の遺児を自分獨りで立派に育てる決心をしたのであつた。それから僅かばかりの田地を女手一つで耕して努力を續けた。その結果、二人の子供を成人させ、しかも家の財産である田地を少しも減らすやうなこともせず、今もつて働き通してゐるのである。

このやうな母親のところに育つた二人の子供は、親の恩に報じたいと念ずる立派な若者になつてゐた。彼はこのやうに母親について語りながら目には涙を一ぱいためて、親の慈愛に感泣してゐるやうであつた。私は彼に壽司と菓子を出して喰べるやうに勧めたが、何うしても喰べようとはしなかつた。そしてやがて彼が歸る時、彼は恐縮しながら「濟みませんが、このお壽司とお菓子をいたゞけないでせうか。私がこうして御馳走になつてゐる

ことを母親に聞かせてやつたら何んなに喜ぶか知れませんが、是非これを見せてやりたいのですが……」と云ふので、私は全部彼に持たせてやつた。

◇

それから一年経つて、また議會が開かれるので臨時の守衛を募集した時に、多くの志願者の中に混つて上田萬太郎も亦應募してゐた。この年は世間が不景氣であつたため、守衛志願者が非常に多數にのほり、従つて採用試験を実施することとなつた。

私は澤山の試験答案を家に持つて歸つて探點してみたら、上田の答案は意外にも不成績であつた。例へば算術にしても、誰にでも出来る極く簡単なものを二題と、やゝ難しい問題を二題提出してゐたのに、上田はその内一題しか解答出来てゐないので、二十五點しかつけられない。上田の勤務振りが特に孝心に篤いことを知つてゐる私は、何んとかして上田を採用し

たいのであつたが、試験答案に間違つた點數をつけるわけには行かない。と云つて上田の



採用を諦

めることは其時私に何うしても出来なかつた。私はこの私情と公事の間に挟つて一晩中苦しんだ。そして遂に意を決して、翌日他の試

験官に相談したのであつた。私は上田の孝心に愛で、是非とも採用したいのであるが、若し採用して試験の點數のことから苦情が出たなら私は潔く職を辭して決して悔ひないと、私の心情を熱心に訴へたところ、他の試験官もそれならば採用しようと思ふことゝなつて、私はホツト安心したのであつた。

やがて議會が開會されるについて守衛も全部集めたが、私は上田を一室に呼んで「實は試験の成績は悪かつたが、皆が君の孝心に免じて採用したのであるから、君も尙一層親に孝養をつくすやうに……」と申した。すると上田はしばらく顔を伏せてゐたが、やがて目をあげて「折角の御厚意は有難く感謝の言葉をありませんが、その辭令はお返しいたしません。私の力が足りなくて皆様にとんだ御迷惑をおかけいたしましたことは全く申し譯ありません。」と云ふので、私は「何を云ふのだ、君はそれでよいかも知れぬが、君が採用ならぬことを聞いたお母さんは何んなに嘆くか、を考へてみなさい。」と云ふと、彼は目に

涙をためながらその辭令を納めたのであつた。勿論上田は會期中眞面目に、他の模範となるまでに職務をつくし終つた。

更にまたその翌年のことであつたが、上田は私のところに手紙を寄越して、「昨年の議會が終つてから、一心に勉強をいたしました。何卒私の努力を試してやる御つもりで試験をして下さい。」と云ふことであつた。

このやうに上田が立派な心掛けから一同に可愛がられてゐた頃、矢張り貴族院に守衛を勤めてゐた宮崎剛治(假名)といふものがあつた。宮崎は綱打ちが上手であつたので、ある時私達幾人かが彼の案内で綱を打ちに出掛けたことがあつた。すると同じ船に八、九歳になる男の子が乗つてゐた。この子供は宮崎の子供で、私はその子供と菓子を一膳に喰べたりして、色々な話をしてゐたが、その内にその子供が小學校に未だ通つてゐないことを知つたのであつた。



私は以前から宮崎がある警察署の巡查部長まで勤めてゐたのに今は守衛になつて働いてゐるのについて不

思議には思つてゐたが、その子供が小學校にも行かぬことを聞いて一層驚いたわけである。その後になつて判つたことだが、宮崎は妻に死なれてから何か警察を辭めねばならぬことがあつたものらしい。彼は非常な酒好きで、守衛になつてからも酒のために同僚には毛嫌ひされてゐたところからみると、きつと妻の死後更に酒癖が悪くなつて何か失敗したのかも知れないと思はれた。

それから幾日か過つた後のこと、宮崎は同僚のものを横領消費したことがわかつて、結局守衛も辭めてしまつた。私は墮ち始めた人の運命といふことについて何かしら考へさせられて、目の先きが暗くなるやうな感じであつた。

この宮崎がそれから三年経つて、突然私の宅を訪れて來た。彼はその時ひどい襦袢を着て、一目で彼のその時の境遇が何んなものであるのか判るやうな身なりであつた。やがて彼が飄然として私に語つた話を聞いて私は今更ながらに因縁の妙をまぎ／＼見せられるや

うな氣がして私も人の運命について強く打たれたのであつた。彼が後悔の涙にぬれながら語つた話によれば、彼は守衛を辭めてから、これといふ職業につくことも出来ず、僅かに趣味であつた綱打ちが上手なところから結局船頭になつたと云ふのであつた。

彼は船頭になつてからも、何うも一ヶ所に落ちついてゐられず、轉々と諸所に移つてゐる内に結局利根川の方に流れて行つた。

ある日のこと彼が住む稻敷郡十餘島村の村長から鯉をとるやうに頼まれて、一心に綱を打つたのであつたが、何うしたものかその日に限つて一匹の鯉も綱にかゝらなかつた。止むなく村長には鯉のとれなかつたことを告げて済んだが、村長が鯉を用意して迎へる人は一體何んな人であらうかと、彼はその時外に用事がなかつたので、船を操りながら渡船場の方に來た。何故なら彼は自動車で来るその客人が道順の關係からは非ともその渡船場を渡らなくてはならぬことを知つてゐたからである。

彼が丁度その渡し場まで來て、折から向ふ岸に渡りつゝある船をみた時、そこには私が乗つてゐたので、彼は十餘島村に來る客が私であり、私に贈る鯉がとれなかつたのだと云ふことに氣がついた。彼は私を見て懷しさに呼びかけやうと聲のぞまで出かゝつたものの、守衛の時に惡事をしてゐるので呼びたくも聲が出づ、そのまゝ逃れるやうにして去つてしまつた。

その時分には彼も長くない半生の間、ふしだらな生活をして來たことに後悔の念を感じ、貧しいながらも人に迷惑をかけないだけの暮し方をしてゐたので、私を見かけて逃げ去らなければならなかつたその時の心情が如何にも情なく思はれ、遂に私の宅を訪れて來たわけであつた。私はこの話を聞いて驚いた。

しかし、ほんとに私を驚かせたわけは、彼の邂逅のことより未だ外にあつた。實は私が頼まれて十餘島村に講演に行つた時、同郡の生板村に前に述べた上田萬太郎が住んでゐ

たので、ワザ／＼彼を講演會に呼んで、私は彼の孝養について語り、彼は村の賞讃を拍したのであつた。この一つの講演會が開かれたと云ふ縁によつて、上田は孝心に篤いことを村人から賞められ、他方には宮崎が悔悟の涙を流さなければならなかつた。同じ貴族院で同じ時に守衛を勤めてゐた二人でありながら、これが僅か三年後になつての變り方だとは容易に信じられない奇しき因縁である。

宮崎は教養もあり、一時は相當の地位にまでつきながら酒のために半生をあやまつた。他方、上田は簡單な算術一つ出来なかつた農夫であつたのに、ただ孝心の篤いために、多くの人からは賞讃され、今尚同僚から愛せられ、模範とまで云はれて立派に職務についてゐる。

孝は百行の基といはれるが、眞似だけでもよいからしたいものは孝養である。親に孝をつくすのは、決して親のためばかりでない自分自身を磨く修養の道であることを忘れてはいけないと思ふ。

歌壇

與謝野晶子選

新宮市 奥村 晴水

かへりくる夜釣の舟をむかへつゝ
焚火してまつ濱の曙ほの／＼と明るる磯べにあまら鯨
見ゆとて勇みつどへる南紀海岸の漁村の曙をいみじくも歌ひ
給へり

小樽市 中村 茂樹

大空は澄みきはまりて大寒の月は
まどかに雪をてらせりふ／＼めりし部屋の鉢梅今朝見れば
開きそめたり香をはなちつゝ群 極寒凛烈たるもすてに春をもちたらず梅
花ありてのどけし

北海道 花田 順住

きく子か上海に行くを長崎まで送りが
海原を遠くながめて祈るなりなが行く船路平けくあれ
送り来て身は別るれど別れずに心はなれに添ひて行くなり
群 送別の情調やかにして言外にある高松市 桂 眞 龍
佛生山法然寺に詣で

高松の枝にかゝれる聲きけば昔偈

ばゆまつ風の音
内海の小島に病ひ養へる身にも聞こえぬ法の松風
炭焼きの煙真直に立ちのぼるこの朝明けの静かなるかな
蒼空にけはしくたてる山脈の霞む彼方ぞ土佐のほのみゆ
海護るますらを弟この勇姿見せばやと思ふ亡きちうはうに
降り積る雪の朝を子等は行く深き木間を見えつかくれつ
君嫁きて早や四年経し春なりと指折つてみる此の年の旦
大裾野みゆるかぎりはすつきりと

東京 三野 輪 幸節

すゝきのかなた白し富士の嶺
さしのぼる日光とともに新らしき世紀の空は晴れて雲なし
那智の山巒の如く浮き出て海さちつとく浦の曙
道しるべと題する佛法語集を贈りて妄想の絶へ間なき身もみ佛の大悲
にもれぬ道しるべかな永遠につきぬ命の道しるべ明るく
てらす法のみ山路父を失ひて
思はれるれんげ咲く野に鉄とりて父を陸みて我がありし日を
君が吹く口笛のよし佇めば蒼空に浮く冬の雲哉
日のさせる窓邊に寄りてぬくもれば物言ひがほに鳩のよりくる
月夜にもにたる心の明るさに姉の

志友會御案内

(どなたも御來會下さい)

一、日時 二月二十七日午後六時半より

一、場所 本所區三好町一ノ三正覺院

一、講師 佐藤賢順、稻田稔、界、佐藤良智、島野禎祥

尙當日は念佛會、文燈映寫會等を催しますから成るべくお早く御來會下さい。

法然上人鑽仰會

投標規定

はがきに一回二首以内とし「淨土」編輯部歌壇係あてに送ること。

汽車道の南の堤日を受けていちめに咲くたんぼの花
小樽市 井 正 金
子らがため父も手を貸し瞳を入れぬ大きな磨を雪もて作り

栃木縣 萬壽 云海



時局より
見たる

家庭と佛教

貴族院議員伯爵

柳 原 義 光

わが國の成立の根本は遠く悠久約三千年に近い肇國の始めからいとも尊き萬世一系の皇室を中心とし、これを國民全體の大宗家と仰ぎ奉りまして、かくの如く隆昌發展を見たのであります。

またこれは我々の古い祖先から今に至るまでの長い間に亘る臣民全體の絶えざる大努力の結晶でありまして、我々はこの大努力の結晶に對して常に最大の感謝と深甚なる報恩の念とを以て敬意を拂はねばなりません。

申すまでもなく今や我が國は肇國以來の大難局にあるのであつて、これに對してはすでに政治の新體制を初め諸般の對策が講ぜられてあります。しかしこの新體制を遂行してゆくについて、假りに外國の諸方面の事物を真似るにしても、必ず採長補短の態度を以てせねばなりません。現在では獨、伊等の諸國が意氣衝天の氣勢をあげてゐるのであります。しかし皇道精神の實現を理想

とし、これを維持する我が國からすれば彼等はたゞ各自の立ち場から強者が互にその雄を競ひつゝあるやうで勿論獨、伊は世界人類の平和を計る爲め我が國とは深き親善の交りのある友邦であるが漫然輕卒にこれを倣仰することは斷して許されぬのであります。即ち飽までも我が傳統的の長所を發揮し、高揚してゆかねばならぬのであります。

鎌倉時代にかの蒙古來襲に際し、宏覺禪師が蒙古調伏の意味で詠んだ歌に

末の世の末の末まで我が國はよろづの國にすぐれたる國といふのがあります。この歌はいたづらに自己満足をして喜んでゐるといふやうにも見ゆるのでありますが、實はこれが即ち吾人の大信念であつて、この精神があればこそ大國民たるの資格があるのであります。我が國現今の時期にあつては、先づ第一に社會

を組織する各層各方面の人々が互に堅い團結の下に至正の誠を捧ぐる一致協力の姿が必要なのであります。従つて我が國が眞に一億一心渾然たる一體となつて、總親和の精神を以て滅私奉公の實現を期し、この時局に善處することに大なる協力和苦心とを用ふべきの秋であります。而していたづらに前途の樂觀もまた悲觀も許されぬのであつて、要するに國民全體が各自の立場とその職分に應じて堅忍不拔邁進興起以て奉公の實を致さねばなりません。即ち戰場にある勇士諸君も銃後にある國民全般も公益優先の觀念と明朗颯爽たる氣分とを以て國家のために奮勵盡力すべき大切緊要なる時期であります。

さて翻つて思ひますに、我が國の成立の根本義は「大家族の結合した國柄」であります。即ち大にしては國家そのものが大家族の集合であり、小にしては我々は皆な一族の一員として活躍して皇國のために働くのが先天的の大使命であります。この精神は苟も我が國民たるものは片時たりとも忘却しては祖先に對して相濟まぬのであつて、また我々の子孫もこの觀念を繼承する義務があります。義は君臣にして情は父子なりと仰せられたのは全くこの事に外ならぬのであります。即ち家族制度は我が國を作りなす根幹であります。

畏くも御歴代の天皇より賜はりました詔勅は皆なこの事をつよ

くつよく仰せられて居ります。實にこれが肇國以來の根本思想であつて、これがまた我が國が世界の各國に巍然として秀づる所以であります。昔より申す修身、齊家、治國、平天下といふ辭は千古不磨の金言至言であります。以上は家庭に關する愚見の一端を述べたのであります。此の雜誌は佛教の雜誌でありますから私は不肖ながらこれより極めて簡単に宗教的信念と信仰が最も大切であることを力説致したいと思ひます。

誠に率直に且つ大膽に私の考を申し上げますと我が神ながらの道はいふまでもなくいと尊きものであつてこれは宗教を遙かに超越した神聖なる國家の大規準とも成る可き肇國以來の國の姿の最高に表現せられたものであつて、何人といへども我が臣民たる限りは此の道を心の奥底から尊崇すべきは當然の次第であります。神を敬ひ神を尊ぶのは我が國成立の根幹たる皇道精神であります。さて儒教の説く所は誠に結構なもので處世修身の要諦として最も適切なる名教と思ひます。然らば佛教の使命如何と申せば抑も佛教は神武天皇御宇の直後北印度に誕生した釋迦牟尼佛の大悟した道であつて爾來印度に榮え支那に弘まり朝鮮半島を経て欽明天皇の御宇に我が國に傳へられ畏くも推古天皇は佛教興隆の詔を下し給ひ聖德太子は十七條憲法第二條に於て「三寶に歸せずんば何を以てか狂れるを直さん」と宣ひ承詔必謹の要請とし

て先づ篤く三寶を敬へと仰せられました。それ以後飛鳥朝、奈良、平安朝を経て戦國亂世時代の武家政治の頃より徳川幕府の時代迄畏くも鎮護國家をおぼしめす敬慮よりして御歴代の天皇の御信仰はいふまでもなく誠に恐れ多い事ではありますが、皇室中心の我々の臣民の祖先が等しく皇室の御垂範御教示に倣ふて日本佛教を信仰し悠久約一千三百年以て今代に至つたことは歴史の證明するところであります。即ち御歴代の御垂示に基きこれを仰ぐ日本佛教は印度や支那の外被を除々に巧妙にぬぎ捨て蟬脱し我が日本の民族の生活と文化とのあらゆる機構の中に浸潤し没入し、神ながらの道や佛教の説くところとも異く同化することにも力めました。傳教、弘法、法然、道元、親鸞、日蓮等の如き高德名僧が輩出して燦然たる偉業功績を宗教界に寄與したことは感謝感激の次第であります。かくて幾多の徑路を経て昭和の聖代に及び八紘一字の觀念に基き一億國民現在の日本精神の血肉は神、儒、佛の説く所いふ所が悉く集成化育したものであると私は信じます。そこで我々は今や明治開國以來心酔して來た歐米の主我的文化、便宜方便式の文化、或は享樂至上主義文化に對して嚴正適切なる檢討を加へるべき時期に到達したのであります。彼等は概ね自己陶醉にかゝり營々として自我を主張し享樂を欲して來ながら、その爲めに現今の失我と破壊と不安の情勢に驅られ、所謂餓鬼道の苦しみを嘗めつゝあるのは惘然にしてまた誠に皮肉千萬の

次第と考へます。然るに此の矛盾を解く偉力あるものは何であらうか。佛教殊に欽明天皇以來約一千三百年に亘り味はひ持ち來つた日本佛教のつくることなき反省の結果であると考へるのであります。戦争動亂の激烈なる現世界に清き生活の黎明を齎らすべきものは畏くも我が皇室の御信念より發し億兆忠良なる國民の相繼で信仰し來たれる慈悲無我の日本佛教の大精神であると私は思ひます。世界の新秩序の建設は斷じて政略や術策や駆け引きやまた武力のみに依る地球上の物資の分け合ひで完成全備するものでは決して無いと思ひます。これは内を省みて外に光る魂の交流具現によつてのみ人類の永遠悠久なる希望が期待できるのであります。

茲に於てか苟も佛教の信者または佛教に至大なる關心を有する人は教義の本來と稱尊の垂示せる教義に鑑み今や全世界に瀾漫せる、英、米、佛、蘇等の唯物論そのまゝの迷夢を破り自覺せしめて内省文化に導き彼等の大なる反省を促し改過遷善せしむる崇高なる大使命を達成する偉業に渾身の努力を致す可き時期であると私は確信するのであります。正々たる皇尊心と宗我に提はれて蝸牛角上の愚なる争を爲すべき秋では決して無いのであります。私が常に最も敬仰する我が歴史中の偉人徳川光圀が佛教に對し一宗一派に偏せず「我は釋迦宗である」と喝破して申されたのは實に私の心から大に賛同する千古不朽の名言至言であります。



岩園市 長岡 白朝
狐追うて歸りの道を誤てり

評 狐のせいではあるまいが、何か關係を
つけたがるのが人間性であり、それを取
扱つて妙味のある句である。

京都市 永田 七郎
賣りも買ひも無き氣安さををら

春

評 どういふ職業の人か知る由もないが、
何を賣らうといふでもなく、買ひためて
置かねばならぬといふでもない結構な氣
安さは今の時代に羨ましく存在である。
下五字は多少一茶氣取りで氣になるが、
面白き表現をとる。

名古屋市 福田 眞吉
笹鳴に炬燵の醉を覺しけり

評 笹子がやつて来た。それを機會に立つ
て行つて炬燵でのぼせたのを覺したと云
ふので、冬季の自然と人間との關係を體
かに寫生した佳句である。

東京市 三野 輪幸節
毛布着し人にもあひぬ雪の道

大和寺 田定 信

藪入りのなにやらかなし辻地蔵

東京市 松岡 成泰
腕時計きらりと冬の日を反す

青森縣 高松 竹堂
胃のいたみしんくんと夜の凍てゆ
くに

満洲開拓團 林 良 碩
秋深く警備道路に兵二人

滋賀縣 安藤 正生
電燈の消えあて今朝の雪あかり

八日市町 佐和 淳
拍手の森に響けり雪の朝

福岡縣 大塚 一三
水仙花風きては松の幹太し

福岡縣 丸岡 長壽
松籟のかそけき冬の潮晴るゝ

岸和田市 田中秋 芳
枯草も苦もなつかし墓参り

滋賀縣 美船 美佐緒
棧俵二つ編みけり事始め

大阪赤十字病院 藤 咲 應
寒月の枕邊守る薬瓶

大分縣 石堂 柑山 生
食べたがる子を中心に年を越す

栃木縣 大輪 清
音たてゝ凍り初夢醒めにけり

東京市 松岡 成泰
大霜のあかき朝日に手をあはす

東京市 浅井 まさ子
源平となりて歌留多の父と母

奈良縣 前田 智圓
草庵の垣くづれぬて春寒し

大阪府 白雲精舍 中
一椀の昆布茶の情寒修行

東京市 名なし 草
寒月の思ひに遠きものあり

東京大森 森田 法晃
夜を寂と眠る樹々あり冬の園

今治市 三木 光子
寒雀次々飛んで離れけり

北海道 花田 順往
延齡の實結ぶとや桃の花

静岡縣 水野 法子
裸木に吹かるゝ風を氣づかひぬ

室戸御町 横山 亮圓
歸還せる子と連れだちて音忌詣り

小樽市 中村 茂舞
軒の雪落ちて目さむる佗び寝かな

徳島縣 海部 山人
雨滴静かに爐火のいよく更けに
けり

大阪府 辻 たき

参道の箒目わたり初詣

岩園市 長岡 白朝
やどかりの白魚網を逃し惑ふ

大阪府 日根野 谷紀三弘
河原の草皆枯れて野火の跡

小樽市 平井 正念
コン〜と氷の下の走り水

鳥山町 大輪 元海
明けてこし足元にして霜白き

山梨縣 杉本 伊子
ボカ〜トナルフクラミヤ路ノ臺

投稿規定

官製はがきに一四二句以内
とし「淨土」編輯部併確保
あてに送ること。

淨き友 信仰坐談會

一、日時 二月(第一日)午
三月(後六時半)十六日
(第三日)曜より

一、會場 本郷區東片町七八橋
本榮祭方

一、講師 選擇 本願念佛集續
中村辨康先生

淨き友の會幹事

「本日は、閣下並に各位におかせられましては公私共に御多忙中にも拘らず、かくも多数御焼香御見送り下さいまして誠に有難う御座

しました。此盛大なる有様は逐一遺族達へ御報告致します、こゝに本官は護送員を代表致しまして一言御禮申上ます」



話 實

英靈船

中野隆雄



力強い輿送指揮官の挨拶の聲はブラツトホーム一杯に響き渡つた。堵列して居る各團體の人々の眼は一齊に英靈車に引きつけられた、やがて發車のベルが鳴る、汽笛と共に列車はホームをすべり出した。

「捧げ銃！」

堵列部隊の嚴肅なる號令と共に各團體の敬禮の内に、英靈は靜かに故國への第一歩をふみ出したのだ。

列車はかつての戰場を次々に通過して行く、砲煙渦巻いた戰場を、或は壕をのり越へ、壘を打ちだきつゝ進んだ戰場を、そして又戦亂に捨てられた子供達と共に過した支那家屋を次々と通つて行く。

支那人でも英靈の通過を知つてゐるのだ、日の丸の旗を持つて線路ばたにきて萬歳を叫びいつまでもくも見送つて下れる。

散華した勇士の墓標に美しい花をあけてお拜りして居た支那の少女も英靈車が通過した時警備兵と共に頭を下げて送つてくれた、護送の兵士達は窓にステツプに出て今なき戦友

に代つて支那人達までに禮をするのである。
日暮時に列車は乗船港に到着した、事變前ま
では英國管理の港であつたが今は日本
の兵士の手で管理されて居る、英靈車
は列車よりはなされて外の線路に入れ
かへられた。今夜はこゝに停車であ
る。

「現地最後のお通夜だぞ」

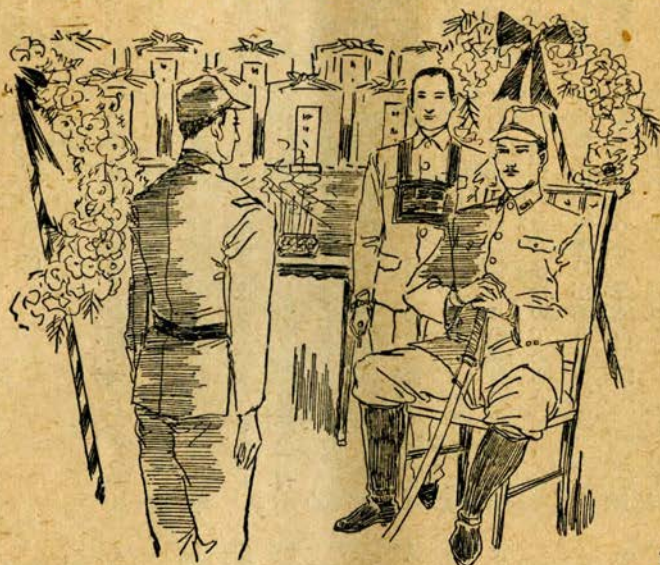
兵士等は指揮官の命によりそれ／＼
の任務についた。居留民は次から次と
お参りに来る「御苦勞さんでした」と
いつまでも／＼頭を下げて居る人もあ
る。従軍僧は低い聲で誦經に餘念がな
かつた。歩哨が何人代つてもやめない
「従軍僧殿、兵站宿舍へ御案内致しま
す」

「私は今夜この車の中で英靈と共に寝
ます」

「へ、でも指揮官殿がおつれる様に
と言われ、お待ちであります」

何人目かの歩哨が交代した。そして再三の

迎へに従軍僧は兵士と共に英靈車を外へ出
た。いゝ月夜である、夜鳥が羽音も高く飛ん



で行つた。

「乗船！」

指揮官の號令に戦友を胸に抱いた護送兵は
居留民の見送る中を靜かに英靈船に乗りうつ
た白布で清らかに飾られた奉安室に次々と英
靈はならべられて行く。

「乗船終了」

大陸最後の別れだ、居留民のあげられ
た花輪にうづまつた英靈に全員焼香した
香煙立のぼる内に居留民も別れだ、午
前八時、剛曉たるラッパの音は大陸をふ
るわせて港内に響き渡つた。

「萬歳萬歳……」

と居留民や、現地將兵の感謝感激の聲
は何時迄も續いてゐる、鏡の様な港内
を、英靈船は一路南へ故國を指して、港
内の船舶の汽笛は高く低く海上へ流れて
来る。

朝霧をついて渤海を黄海へ乗り出し
た。稀に見る靜かな航海である。護送兵
の耳にはあの萬歳の聲がまだ残つて居る
のだ。

「貴様とこの黄海を通つた時俺は貴様に骨を

たのんだ、それなのに、たのんだ俺が貴様の遺骨を抱へて黄海を渡るなんて……」

戦友と征途の途中に約束した、其の時を思ひ出して奉安室に泣いて居る兵もある。本當に静かな航海だ、海を見つめて居る兵、線香を立て直して居る兵、英靈の前に座してじつと何か考へてる兵、思ひは皆同じであらう。

「航海中の日課を申し渡す」

指揮官の隣に一同英靈の前に整列した。そして朝晝夕の三回食事前に奉安室に集合し従軍僧の發聲でお經を上げ、参拜する事。外日直事項等の申渡しを受け、それらの部屋に歸つた。そして思ひ出の黄海も通り三日目朝鮮南端を通過した。本當に静かな航海であつた。そして更に一日、日露戦争當時の「玄海灘で手をにぎり……」の軍歌を思ひ出しつゝ夢の間に日本の朝は來た。内地の島々が見え出した。朝霧の中に一つ、二つ、兵士達は皆な懐しさうに甲板に出で故郷を思ひ出しつゝ眺めて居た。

奉安室に次々と兵士が飛込んで來る。どの

兵士も、どの兵士も自分の戦友の遺骨の前に來て、

「おい、日本が見えたぞ、お前の故郷、俺達の故郷が見えたぞ」

と告げて居る。

故郷を離れて大陸の戦線に過して居る兵士等は内地の香を少しでも嗅ふとして居る。故郷の便りに、慰問袋に、慰問の人々に、内地のかほり、故郷のかほりを求めて居るのだ、

今日の前にその故郷の姿を面り見るのだからそのよこび、感激はどんなであらう。然し兵士達はその自分を先づおいて今はなき戦友に一々報告するのである。鳥が一つ見える度に、内地の陸が見えることに奉安室に馳込むのだ。この友情、この氣持こそ日本の勇士のみが持つ尊ひ姿なのであらう。

「指揮官殿、お願ひがあります」と一人の兵が輸送指揮官の室に飛込んで來た。明日の上陸に従軍僧と諸般の打合せをして居た指揮官は何事だらうと後をふりむいた。

「何んだ」

「ハ、故郷が見えて來ましたので山上下等兵に見せてやり度く思ひます山上下等兵の遺骨を甲板までつれて行つてもよくありますか」

指揮官は「ウム」と兵士の顔を見た。

「それはこまるな、遺骨はむやみに持ち出せんのだ」

「ハ、山上下等兵の故郷の前を、もうじき通過致します。それに山下は漁師でありまして出征前まで此邊の海で魚を取つて生活をして居つた者であります」

護送員の兵士は一所懸命である。

「ウム、そうか」と指揮官は傍の従軍僧を見た、どうしようかと云ふ様に、

「指揮官殿、では位牌だけでも持たしてやつたらどうですか」

従軍僧は指揮官と兵士とを見た、兵士のほかに數人の涙が流れて居る。

「よろしい、お位牌だけ持つて行つて、ゆつくりと故郷を見せてやれ」

「ハイ、有難うございます」

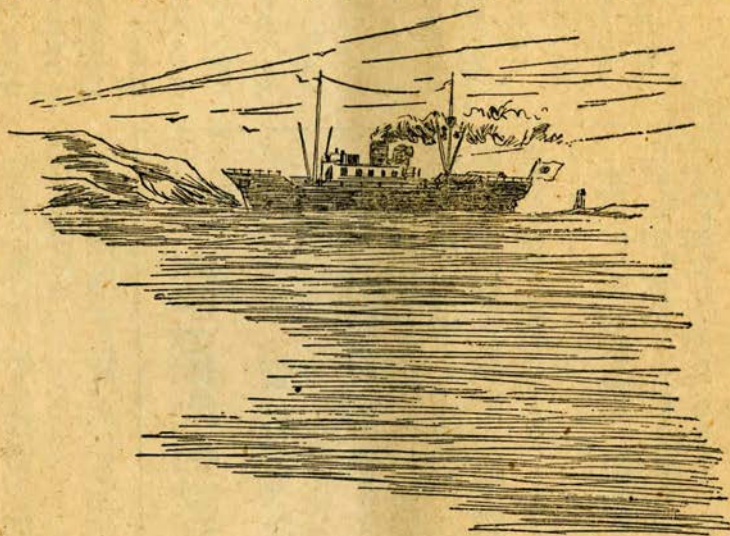
兵士は涙の顔を喜びにふるわせて挙手の禮

をするに奉安室へ馳けて行つた。

「おい山下、貴様の故郷だ、見えるかおい、貴様がよく思ひ出して、霧の中や露の時の俺達に話して下れたお前の故郷、そしてお前の職場だつた海だぞ、なつかしいだらう、山下」

彼は泣いて居た、生ける友に話す如く、戦場でよく懐しんで居た故郷を指して見せて居る。甲板に出て居た兵士は皆な泣いた。船は船腹に感激のしぶきを上げて一路汽笛も高らかに故郷の海を走りつゝよけて居る。行交ふ船々は皆日の丸の旗を打つて英霊の勳績を稱へて感謝の汽笛をふきならして行く。

英霊船は鏡の様な内海をすべつて居る。いつか太陽も西にかたむき海の水は金泥の如くかどやき、空は西に洗みつゝある太陽と共に大きな日章



旗を形づくり英霊船をつゝむ様に赫々たる武

やがて颯々たるラッパの音が静かな瀬戸内海に響き渡つた。護送の兵士等は偉儀を正して奉安室に集つて来た。従軍僧の念佛の聲が全員の共誦の聲と共に英霊に手向けられ船内最後の回向が始まつた。

明日は父母兄弟の待つ懐しの故國への上陸である、兵士等の心には今なき戦友の姿がはつきりと浮んで居るのだ、明日は無事に故國へ送りとよける事の出来る喜びと、この戦友と別れねばならぬ悲しさ淋しさとこつちやになつて忍びがたい思ひに知らず／＼稱へる念佛の聲も従軍僧よりも大きくなるのだつた。そして月が船上を照す頃兵士達は明日の別れの淋しさを抱へながら寝についた。皆なねられぬらしい、中にはこそ／＼と起出して奉安室へ行くものもある。今夜だけは歩哨の志願者が多くて指揮官や日直下士を困らせたのだつた。

何時の間にか夜は白々と明けはじめた、船は目的地神戸港内にある、船腹に日の丸の旗を大きく浮かせて澤山の船が英霊船を見守つ

勳をたゞへ輝いて居る。

て居る。何處かでボーと汽笛が鳴つた。朝が来た。六甲の山々がはつきりと姿を現はし、方々の工場の汽笛が時を知らせる頃、船は静かに岸壁へ近づいて行つた。岸壁には在郷軍人、國防婦人、愛國婦人等の各團體を初め小學校、中學校、女學校の生徒、そして各大學の學生、神戸市民、近郷近在の人々までぎつしりと埋つて居る。眞白な國防婦人の前に並び居る遺族達は眞黒な喪服に身をかため肅然と列んで居る。

人、人、人で港内は一杯である。

護送兵達は戰友の英靈をしつかりと胸に抱へて甲板に整列して居る。船は動いて居るのか動いて居ないのかわからぬ様に岸壁へ近づきつゝある。嚴肅な時だ、音一つ立たない、森羅萬象、總てが、唯英靈の凱旋を迎へるだけだ。無言で、感激の腫、感謝の心だけで。本當に何もない唯皆んな胸が一杯なだけで。英靈船は岩壁に着いた。

「敬禮」

林の様に列んで居た各國旗會旗は一齊に下

にさがつた。「國のしづめ」がラッパで奏せられる。護送員の戰友の感激にふるふる腕の中では英靈が白布の箱の中で敬禮に答へる様にカタンと鳴つた。

やがて上陸は開始された、ぎしりと列んだ



増谷文雄氏「先師を語る」に

資料をお借し下さい



人々の前を無言の凱旋の行列は肅々と過ぎて行く、先頭を行く從軍僧の口からもれる念佛の聲だけが靜かに流れて来る。

(福田 勇畫)

これまで「宗教地方色」を連載せられ、有益な信仰實話として好評を拍した増谷文雄氏は、更に本月號より「先師を語る」と題して、徳川末期から現在に至る間の浄土宗高僧の傳記を連載して下さることとなりました。

増谷氏はこの「先師を語る」に筆を執るに際し非常な意氣込みを以てあたられ、「この仕事に些か意義を感じてをります」と申されてゐます。また同氏は追記にもあるやうに、近代の高僧傳であるだけに浄土宗の各位の中にはしかるべき資料を澤山に持つ方もあらうと考へ、出来ることならその資料を以て御援助を得、同氏の記述をして内容を豊富に、又過誤少なからしめられたものと熱望してゐます。

勝手ながら右資料をお持ちの各位は何卒浄土宗高僧傳を御指導下さる御芳志を以て御後援下さるやう御願ひ申し上げます。

(編輯部)



お饅頭のいはれ

原田 萬吉

懐しの饅頭

お饅頭と一口に云つても、いろいろな形をした饅頭があり、従つて味も夫れ夫れ違つてゐるが、そのくせ饅頭と云へば何れも皆同じ特色を持つてゐる。すると形だとか味だとかの相異と云ふことは、お饅頭にとつて、さして重大なことではないのかも知れない。一度に饅頭を十個食つたとか、二十食つたとか云ふ話を聞いたやうな場合に聯想する饅頭は、一つを二つに割つて食べる圓形の、そして極

く甘味のかゝつたものが目の前に浮び出る。尤もお饅頭といふ名稱の吾々の耳に與へる語感がわれわれにとつて懐しく思はれ、「何んな味の饅頭だい」等と一々問ひ返さなくてもよく判るものである。しかし實際には同じやうな味の中にも、何店の頭饅はこんな味であるとかあそこのはあんなであるとか云つて、決して外では眞似の出来ないその店獨特の風味を持ち、それがまた店々々の傳統となつて今までに賣り込んで來たものである。こうなると饅頭は賣

つてゐる店の數だけ種類もあるわけ、數限りなくふえてゆくこととなる。

普通に洋菓子といはれてゐるものが、土臺が全部カステラで、色や形こそ千差萬別の百花撩亂と美しく飾り立つてゐるものの、その味は大低が大同小異で、特に風味などといふ點に至つては、未だ自慢するだけのものを持つてゐないやうである。これは洋菓子の製造所が大きな幾つかの工場で作られ、これを方々に配つて賣るといふ、云はば機械で製作された菓子

笑話

(投稿歓迎
薄謝を呈す)

煙草第一主義

監督「君、作業中、外へ出て煙草を飲むとは凄い心臓だね」
工員「ハイ室内だと石油があるの
で、危険だと思ひまして……」

(東京 小野浩)

一列勵行

係「モシ／＼、列から出ては、困りますネ」

男「すまん、實はうしろに借金取が居るんで、頼むから逃がしてくれ」(名古屋 田村清蔵)

宗(州)違い

太郎君「次郎君長野縣の善光寺は

といふ感じであるところからこうなるのかも知れぬ。それに反して饅頭は一軒々々の菓子屋での風味に苦心しながら少しづつ作つてゐるので、昔ながらの秘傳といつたやうなものを食ふ氣持であるとか云へようか。近頃洋菓子店の店先きに饅頭が陳べられ、派手に裝飾された窓の真中に濃い色を見せてゐるのもおかしい風景である。

饅頭の起源

この饅頭は支那から傳つた菓子であつて、更に支那での起源は諸葛孔明の發明にかゝると云はれてゐる。

諸葛孔明が軍を率ひて瀘水といふところまで来たところ、折から強風に驟ぎたつ濤が荒れて渡れなかつたので、或るものが水神を慰めるために四十九人の人頭を生贄

にして祭壇に供へるやうに進言したのださうである。ところが孔明は如何に難澁しても生贄に人を殺すのには賛成出来なかつたとみえて、一案を考へ出し「羊豕肉を混じて數に和し、假に人頭に塑成す」といふから、生贄の代用品で間に合せるの妙案を考へ出したわけである。そしてこれを祭壇に供へ水神を祠つたところ、これは確かに代用品の方が美味しかつたに相異あるまい風浪も靜つて無事河を渡ることが出来たといふ。

これが饅頭の始まりで、饅頭は饅頭の轉訛だとも云はれ、また曼帳幕の略で上から覆ひ被せることとであり、頭は宴會の席上で最初に出すものを頭食といふところから名づけたものだとも云ふ。

この饅頭が日本に傳來したのに諸説があつて、建仁寺の龍山禪

師が入宋した時に彼の地で弟子になつた林淨因といふ人が禪師の歸朝とともにわが國に來り、歸化して姓を鹽瀬と改め、南部に住して奈良饅頭を始めたといふのがその一説である。これはわが曆應年中のことである。

そしてこの時には、當時支那にあつた肉饅頭や菜饅頭を傳へずに砂糖饅頭だけを傳へたといはれてゐる。

また福岡の方には博多饅頭の始まりとして外の説があつて、聖一國師が支那から初めて傳へたといふのがそれである。

聖一國師は名を辨圓といひ、嘉禎元年四月に肥前平戸を解纜し、入宋して六年諸學を極め、淳祐元年五月内外典籍千餘卷を携へて歸朝し博多に到着した。

聖一國師は仁治二年藤原資朝と

何宗か知つてゐるか、云つて見給へ」

次郎君「信州だらう」

太郎君「いや違ふよ善光寺は淨土宗だよ」

次郎君「でも信州長野の善光寺で云ふじやないか」

太郎君「……」(大阪 森正義)

昇格

A「自轉車、大分上手に乗れる様

飲めば益々

元氣旺盛

無臭にんにく、
粉末固形にんにく
特約店御希望者タノ
ミタシ

静岡市上香谷町

神谷昌孝

掲載東京一四六五一番

宋人謝國明とが創立した博多承天寺の開山第一祖となり、更に建長七年京都東福寺の開山第一祖となつた人で當時の大學者であつた。

この聖一國師が未だ博多にゐた時分のこと、ある時、福岡浦(今の本町)を通行中に路傍の一茶店に休んだ。そしてしばらく色々な話をしてゐる内に、たまたまその茶店の主の栗波吉左衛門に支那で學べた餞頭の製法を教へてやつた。

吉左衛門は非常に嬉んで、早速この餞頭を作つて賣ることゝして屋敷を「虎屋」とつけた。そして製法を教へてくれた聖一國師に看板を押さしてもらひ、虎屋餞頭としてだんだん評判も高く、博多餞頭の始祖となつたのだと云ふ。

その後栗波家では子孫代々聖一國師筆の看板を家寶として傳へこ

れに燈明をあげて祠つてゐた。又黒田藩主からこの看板に對して祿を賜つたこともあると傳えてゐる。更に後になつてこの看板が栗波家から出て、骨董店に出たりして人手を轉々したが、結局今から十年ばかり前のこと福岡市立通俗博物館に陳列されたことがあつた。

このやうにして聖一國師は博多に餞頭の製法を傳えたが、寛元元年二月藤原道家の請に應じて上洛した際に、京都にも餞頭の製法を傳えたのであつた。

むすび

とに角こうして凡そ七百年も前に支那から餞頭が傳へられ、今では菓子といへば餞頭を思ひ出す位になつてゐる。和菓子の中にも随分と派手なものがあり、見るため

なのか喰ふためか判らぬといふより、全く見るためだけに作られた菓子も京都の方に可成り多いが、餞頭だけは第一形からして見るからに圓い野暮な姿をしてゐて、食べばとても美味しいのだからほんとに嬉しい菓子である。餞頭が茶の好伴侶となり、お茶が茶道として發達するに従つて、餞頭の方にも滋味が加り、外見も風味も如何にも落ついたものとなつて來た。餞頭と云へばおいしいお茶を思ひ出す。

その昔は支那から傳はつた餞頭であつても、今の料理屋で出す支那餞頭のあぶらぎつてコツテリしたものとは月とすつぽん、天と地の相異がある。餞頭も亦元祖を外國にもつてゐて、今ではすつかりわが國風になり切つたものの一つである。

になつたネ」

B「ウン、何しろ昨日は人間をひいたけど今日は犬ですんだからなア」(埼玉 三輪祐道)

要領のいい男

田舎道で、自動車の男「モシ／＼驛へ行くには、どう行けばいいんでせうか」

つかれた登山家「丁度いい、わたしも驛へ行く所だ。案内をするから車へ乗るぜ」(東京 山崎生

聞き違ひ

父「あれ程煙草は禁止したと言つておきながら、又のんでけしからん」

伴「エ、だからチェリーを止めて禁止、(きんし)にしたんです」(北海道 Y M 生)



六 解 註 歌 和 人 上 然 法

承 覺 西 安

睡眠の時十念を唱べしと云事を

阿彌陀佛と十聲唱へてまじろまん

ながさねぶりになりもこそすれ

〔語意〕

○まどろむ しばしねむる、とろりとする。○なりもこそすれ なりもすといふ所をこそと語勢を強めてすれと已然形で結んだのである。

〔通釋〕

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と十聲唱へて眠らうよ、常なきこの世、しばしの眠がやがてそのまゝに永き眠となりするのだから……。

〔感想〕

今日がこのやうにあるから明日もまたこのやうに、從來がかうだから將來はそのやうにとどうやら過して来た今迄に慣れきつて、漠然たる安易を未來に托し、油斷しきつてゐるのが私共お互ではなからうか。しかも一夜の睡眠のうちに起り得る變異のすべてを誰が豫見し得よう。結局お先眞暗、一寸先は闇といふのがとかく私共の生活の眞相なのだ。さう氣がついたらお念佛を稱へよう。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、稱へてみると、直に何ともいへぬ安らかさが擴がつて来る。今迄の安易さとは違つた

安らかき静かさだ。伸び／＼と心の隅から隅までをこの嬉しい安らかさが浸し亘つたとき、平和な眠が既に訪れてゐる。そこではたとひ知らぬ間にどんな變異が起らうと悔などあり得ない。すべてがみ佛に任されて執着、滞滞するものが何一つないのだから。とかく妄念に煩はされて耽つかしい不眠にさへも陥りがちな私共、このお歌を忘れず、就床必ず十念を稱へて安眠に生きようではないか。

〔参考〕

慈鎮の拾玉集卷一に

阿彌陀佛と十度唱へて睡まむやがて誠の夢ともぞなる
とある。彼が上人に師事した關係の人である事は「月影の」の詠の所で述べた。



上人てづから書付給へりける

千とせふる小松のもとをすみかにて

無量壽佛のむかへをぞまつ

〔語意〕

○千とせふる 千年も永く榮え續く。下句の無量壽と照應させてある。○小松 老松をも小松と稱する。これは上人

幽栖の小松谷にあつた名木を指すのであらうといふ空花集著者の説を採る。

〔通釋〕

千年も永く榮え續くこの小松のもとを住居として、かの量なき壽のみ佛——阿彌陀さまのお迎へを待ちうけることである。

〔感想〕

このお歌に理窟はない、千とせといひ、無量といふ快い諧調のうちに素懷を端的に詠出されたものと拜する。松はめでたい木である。強く永く生きる木である。たのもしきことだ。まして無量壽の佛のたのもしき有難さよ。空花集に厭欣の勸としてゐるのは如何かと思ふ。

〔参考〕

「上人てづから書付給へりける」

この歌にかゝる前書があり、それから引續き五首の歌の末に、

「元久二年十二月八日 源空」

とある（勸修御傳）點からして、これらの五首はその日時に、多分は小松殿で、上人が親しく物に書き留められたものと解せられるのである。



おぼつかなたれかいひけんこまつとは

雲をさゝふるたかまつ枝

〔語意〕

○おぼつかかな 形容詞「おぼつかなし」の語幹。不審なり、心許なしといふ程の意。

〔通釋〕

小松などと一體誰がいひ始めたのであらう。心許ないことだ。現に亭々と延びて枝は雲を支へるかとまで見られる巨松であるのに……。

〔感想〕

前歌に引續いて拜見すべき詠である。その名木の有様の目に觸れるがまゝに感興を覚えてお詠みになつたものであらう。諷刺があるといへばあるやうでもある。例へば、淨土門といふ偉大な教を何か低級な教義のやうに解する立場、そんなものを念頭に置かれてお詠みになつてあるといつたやうにある。けれどもお歌の拜し方としては、とやかく穿つてみるよりも、有の儘に含善多く頂いておくのがよろしいと信ずる。

〔参考〕

この詠は夫木集卷三十四にも出てゐる。

興亞大乘學寮々生募集

本學寮は日支兩國の優秀なる學生を理想的に教養し兩國の和平と共榮に盡さしめんとするものであります。在支在滿の本宗檀信徒の子弟並に内地檀信徒の子弟にして大陸進出志望の學生若干の入寮を希望致します。

東京市世田谷區下馬町一丁目二〇八番地

興亞大乘學寮

記

申込期日 三月三十日まで

室 料 六疊一室一ヶ月 金拾八圓也

食 料 一日二食一ヶ月 金拾七圓也

交 通 東横線祐天寺驛より徒歩十分間

慶大、法大、明大等の豫科並に藤原工大等に二十

五分間

本郷、神田、早稻田、三田等に四、五十分

環 境 郊外靜閑の地

大陸を志す人に

北支戦線にて 渡邊明道

多數の有能の士が續々と大陸に渡つて来て、興亜のために率先こゝにあたつてゐることは力強い感じをおこさせます。しかし残念なことには、これ等大陸に渡る人々の中での一部にはまだまだ中國人に對する認識を缺いてゐるのではないかと思はれる節々があります。先日〇〇機關から邦人に對して注意が與へられた中に「横柄」を憚むやうにとの一項がありました。吾々は實に尊い國に生をうけた大和民族としての誇りを持つてゐます。而して何物をも同化し、何物をも抱擁し得るところの大海の如き心こそ本當の大和魂である

と思ひます。この尊い先祖傳來の心を充分に生かし、活躍せしめることこそ二千六百年の重大なる任務ではないかと考へてゐます。更にこの大和魂を實踐に現はしてゆくことが一人一人に與へられた義務であると云つても過言ではあるまいと思ひます。

この時大陸に渡つて来る人々は何れも皆それだけの覺悟を充分に持つてゐるのに相違ありません。だがしかし實際に大陸に働いてゐる人々の一部には上述の注意が與へられなければならぬ人々があると思ふ事實に對して、私達は深刻に反省せねばならぬものがあると

思ひます。私は佛教徒であり、法然上人の流れを汲むものの一人でありますから、これ等の事情に對して大した文句も云はれず、ましてや只今は戎衣に身を固めてゐる以上、かゝるところに一言も差出口することは許されてゐません。

然し聖戰の目的を考へ、吾等大和民族に與へられた義務を思ふ時吾々はもつと中國人を理解し、認識を深めて、いやしくも他をいぢめるといふが如く見られるやうなことがあつては斷じてならぬと痛切に感じます。彼等とともに話してみれば、矢張り同じ人情の温かさがあり、同じく東亞の平和を祈るの心が湧いてゐます。勿論ここに云ふ中國人は南京政府支配下の國人を云ひます。そしてお互に助けつゝ助けられつゝして、一路大東亞の建設を目指して突進しなればなりませぬ。

それにつけても吾々は同じ大和民族として、新政權下の民衆を理解し、親切に眞心を以て指導してゆくことが一番大切なと思ひます。わが淨土宗の根本精神もそこにあらうかと存じます。

宗祖上人が御醗流の時に、念佛をお止めになつたらと申した弟子に對して、「吾たとひ死刑に行はるるともこのこと云はずばあるべからず」と決心を披露遊ばされました。あゝこの御精神、あの大信念あつてこそ初めて衆生濟度の大業が開かれたのです。何ごとにも鐵火の如き信仰がなければなりません。

明治天皇御製
おのづから仇のころもなびく
まで誠の道をふめや國民



談相仰信

藥師、彌勒、觀音、勢至

問

左記のこと御尋ね致します

一、藥師如來とはどんな御方か。

二、彌勒佛、又は彌勒菩薩と云ふ譯は。

三、觀音勢至は佛とは云ひませんか。

(照本、江田、五野一之)

答

一、藥師如來本願經に依れば、東方十恒河沙佛土の外に「淨瑠璃」と云ふ佛土

があつて、その土の佛を「藥師瑠璃光如來」と云ひます。その佛が菩薩であつた時、十二の大願を立てられたが、その願を成就して「藥師如來」となられたのだと云ふことです。それで「若し人重病にかゝつて死相が現れた時、此の人の爲に晝夜六時に藥師如來を禮拜供養し、四十九遍此經を讀誦し四十九燈を燃し四十九天の五色のはたを造るならば、其の人は夢から覺めたやうに神識還復してその命を續ぐことを得」とあるところか

ら、専ら「續命法」として藥師崇拜が支那にも日本にも行はれたのです。

二、彌勒菩薩は此の娑婆世界に於て釋尊に次いで佛となり給ふ御方であるから「補處の菩薩」とも云ひますが、既に佛を約束せられて居るところから「彌勒佛」又は「彌勒如來」とも稱せられるのです。賢愚經波婆利品に依れば「印度の波羅奈國波羅摩達王の輔相に一人の子があつて三十二相揃つて居る立派な容

を持つて居たが、母がこの子を懷妊すると性質が一變して非常に慈悲深くなり庶民を助けたので、遂に其の子に字して彌勒(慈氏)と云つた。のちに釋尊の弟子になつて佛を約束された」と云ふことです。

第三の御覽の觀音勢至の二大菩薩は阿彌陀如來の補處の大菩薩として知られる通り、佛位ではなく菩薩位であります。日中禮讃に「已得菩提捨不證」とある如く、既に菩提

談相仰信

當擔

康辨村中

(迎歡問質)

を得て居て佛と同じであるけれども、わざと身を下して衆生が接近し易いやうにと覺召されて「佛を證しない」で菩薩位に甘んじて居られるのであります。元來「菩薩」と云ふのは「佛をめざしつゝある人」のことで、ピンからキリまである筈ですが、かうした觀音様や勢至様のやうな大菩薩になると、もう佛様と同様ですから、一般に佛菩薩を引きくるめて「佛様」と云つて居るのです。そして前述



談相仰信

の彌勒菩薩とか或は虚空藏菩薩のやうに人口に膾炙され崇敬されて居らるる菩薩方は皆な

神佛に對する心持は？

問

神佛に對する心持は、或る事を祈願するにあるのか、又は仰せに絶対に服従するにあるのか、この二つの中では何れが正しく、何れが優つて居ますか、御示教下さいまし。(新潟縣、西蒲原、今井生)

答

神佛に對して祈願すると云ふことは、宗教行爲の中の一でありまして信仰そのものではありません。宗教行爲としては通佛教的には「願」と「懺」と「讚」などが(此外には「誦」「觀」「拜」「念」等)があります。その代表的なものです。「懺」とは現在の自分を省みて「すまなかつた」と云ふ悔ひ改めの氣持を神佛に披瀝することであり、「讚」は神佛を信

「佛」と云つて差支へないと思ひます。

ずる餘り、感謝讃嘆の氣持を表現することでありますが、「願」には大別して二種ありますが、一は物質的なもので、例へばお金が儲かるやうにとか、病氣が癒るやうにとか、災難が除かれるやうにとか云ふ類で、その多くは迷信類似なものです。二は精神的なもので、例へば自分の人格を高めたいとか、國家が隆昌するやうにとか云ふ類です。次ぎに神佛の仰せに従ふ氣持は神佛への絕對歸依から來るもので、これこそ「信」そのもののすがたです。かの「佛の捨てしめ給ふ

勤行式の請佛と送佛

問

一、日用勤行の中の四奉請の文の中「入道場」の三字に就いて、小

ところのものを捨て、佛の取り給ふところのものを取る」と云ふやうな生活になり得たら本當に立派なものです。然しさうは中々なり切れません。そこで「懺」もあり「願」も出て來るわけです。

ですから貴氏の御質問の「願」と「信」との比較優劣を論ずることは無理であつてこの二つは比較すべきものではありません。願そのものの内容についての比較、信そのものの内容についての比較ならば出來ます。但し多くの人の中には神佛へ立願を以て「信」と考へて居る人があるかも知れません。そしてその願の多くは物質的であり功利的であり勝です。若しそれとらば無論あなたの御質問も成り立ちます。そしてそう云ふ功利的な私利的な「願」の正しくないことは云ふまでもありませんことです。

生の日頃の信仰の「日夜佛と共にあり」又は「佛光の中に生活させて頂いて居る」と



信仰相談

言ふ考へから見ますと、何うも其の度毎に佛を奉請せねばならぬと云ふ必要はないやうに思はれますが、何故に「入道場」を請はねばならぬのでせうか。

二、最後の送佛の偈に就いても同様な疑問があります。可笑しい話ですが、佛を送ると云ふ事は何か淋しい氣が致します。

右二項御教示下さい。(九州、佐藤生)

答

信仰の上から申しますれば、常に如來様と離れて居るわけがなく、

如來様と共に起き共に寝るのであり、遍照十方攝取不捨の慈光の中に生活させて頂いて居るではありませんが、然しよくよく反省して見ますれば、日常煩鎖な用事にかまけて如來様を忘れ勝て居る場合も相當にある筈であります。本當に寝ても醒めても如來様と離れず如來様を忘れることがなければ、その方は誠に常三昧の人であつて尊いお方として尊敬せ

ずには居れません。あなたが若し本當にさうした心境に住して居られるならば、誠に美しいことです。然しながらさう云ふ心境の人ならば、尙ほ更、何處でも何處でも如來様を奉請申し上げずには居られないでせう。

御名を呼び奉るのもそれと同様な氣持であつて、如來様と日夜を共にして居ても、常に御名を呼び奉らざるを得ないのが、その人の心境ではないでせうか。ちつともおかしくもなく不自然でもないと思ひますが如何でせう。必要とか必要でないと云ふやうなそんな打算的な氣持でなく、呼ばずには居れない感情なのです。奉請せずには居れない感情なのです。まして改たまつて法要を營む勤行の場合ならば、尙更禮儀を以てするのが本當ではないかと思ひます。

二の問題の「送佛偈」は、是れまた禮儀上の問題であつて「請佛」があれば「送佛」が

追善供養の意味

あるのは、儀式の通規であつて當然なことです。三大節等に兩陛下の御肖像を奉安して開扉閉扉を行ふのが當然のやうに、儀式に於て結末をつける爲に「送佛」するのは止むを得ないことです。然も「不離佛」ですから「追護念」とも云つて居るのであつて、淋しいと、云ふやうな問題とは異つて居ると思ひます。また第一問と第二問とは矛盾して居りはしませんか。第一問のやうに「佛と共にあり」と思つていらつしやるならば「送佛偈」を唱へることに依つて急に「佛は去り給ふ」と考へる筈もなく「共にあり」の信は解消されないと思ひますが如何でせう。私達は親縁近縁増上縁の三縁に依つて如來様とは切つても切れない關係におかれて居りますのに、如來様が一步近づき給ふか一步引き給ふかに依つて淋しさを感じ又は重復すると考へるのは全く矛盾して居る考へかと思ひます。



談相仰信

とか、御自分の身にか
なつた事をなさること
も誠に結構です。よい
上にもよかれかしと願

ふのは、人として本當の務めだと思ひます。
ですから追善供養を度々なさるのは誠に結構
なことであると存じます。殊に之れは我國特
有な風習で、祖先に對する最も美しい國民性
の現はれであつて、他國のまねの出来ないも
のですから、決して功利的に考へてはいけま
せん。また二つには此の追善供養は表面亡き
人の爲にすることではありませんが、それは直
ちに回光返照と云つて御自分の修養修徳の行
爲となるものでありますし、また他面には社
會教化と云ふと少し大きすぎますけれど、少
くとも社會的に好影響を與へて居る意味に於
て、社會教化的意義もあらうかと思ひます。
ですから云つた二重三重の効果は皆な
悉く亡き人の菩提増進への功德となつて回
向されるのであります。随つてその志す亡
き人のみたまへの効果はかゝる間接的な意
味でも大きいものがあると確信されます。但
し亡き人への直接的な回向の意義に就いては
「淨土宗叢書」に出て居りますから、それに
ゆづつて今は之れだけに止めて置きます。

問

人が亡くなりまして七々日とか一
周忌三回忌乃至五十回忌と云ふや
うに追善供養を重ねますのは、どう云ふ譯
でせうか。効果が少くないとか、足りないとい
か云ふ譯で、度々やらねばなりませんので
せうか。その邊のところを有りのまゝに御
教へ下さいまし。(長崎、北浦、西村)

答

善いことはいくら重ねてもいいで
せう。効果があるか無いかと云ふ
やうな功利的な考へを基礎にして、追善供養
をするならば、それは大變な間違ひです。追
善供養は、一つには亡き人への孝養でありま
して、亡き人へ孝養をするのに外に方法があ
りませんから追善するのです。外に方法があ
ればそれもなすつてよいでせう。例へば色色
な國家的なものに寄附するとか、或は自ら社
會事業公共事業を起す

一億で背負へ譽の家と人

左記諸症の方に...

治病藥養強壯兼備(家傳)大自然藥

官許 鐵鑛泉を御すゝめ致します

古來より鐵泉は疾病に特效有ると評せられ、自然藥の研
究と共に其の醫治的効果も追々發見する所となり、從來醫
藥其他にて致を發せざりし幾多の難病因疾をも全治せしめ
るに至り近時益々其の眞價を認められて珍りました
科學の發達に伴ひ鐵化學の急進に進歩して居ります。今日
でも、本鐵泉の偉大な効力に對しては諸博士大家先生の
ひとしく賞讃せらるゝ處でありまして、既に實績著有諸
君間に神藥の如き感をもて迎へられて居ります。他藥其他
にて治らぬ方お困りの方は御理解の上是非一度御試し下さ
い。

▽胃酸過多症(胸やけ)にて難治の方
▽胃潰瘍にて種々手を盡しても治らぬ方
(胃潰瘍重症の方でも末期定命の靈さるゝ限り奏效百パー
セントにてこの種の全快者多数)

▽腦病、神經衰弱症、心臓、腎臓の惡るい方
▽呼吸器病、ロクマク、痔疾

▽中風にて手足のきかぬ方、婦人病

▽動脈硬化症、血壓の高い方(腦溢血、卒中の
豫防として特におすゝめ致します)

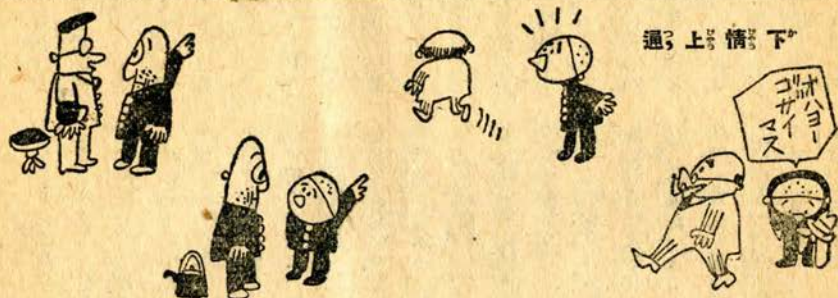
外カテログ明記の各種症狀に特效あり
衛生試驗所御試験済 御服用に際しては、
決して身體に害なき至極安全藥であります。

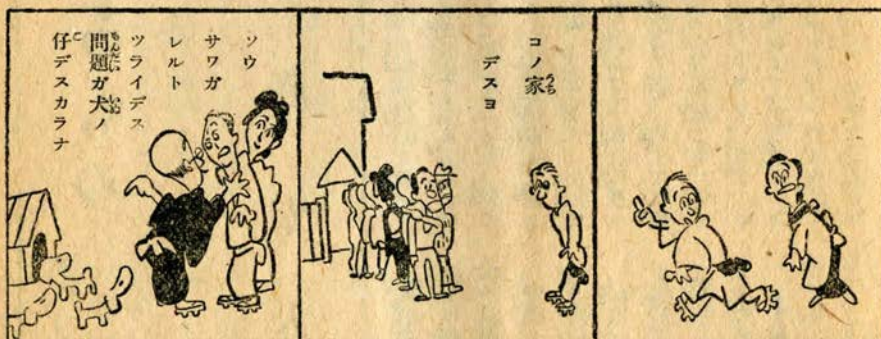
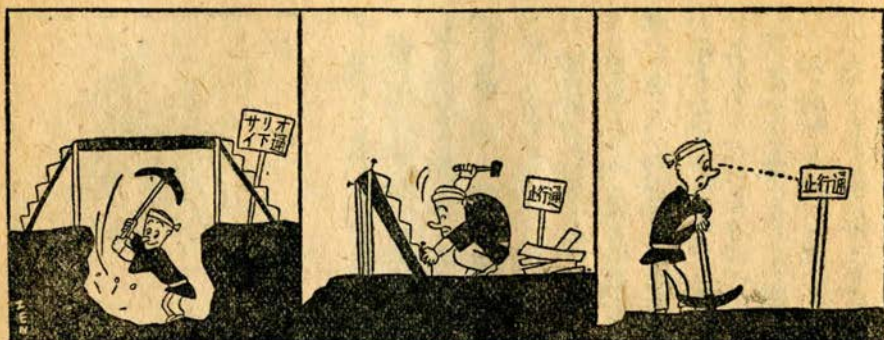
用法 内服 湯布 浴用 座藥等々

其他詳細御問合はせは左記へ

東京市王子區神谷町一ノ二四 柳川欣三

(實驗療法大要) 御申越の方に差上げます。





新漫画家

山崎善一
川口久
をぎ原賢治

すぐ
郵便局へ
持って行きま
せう



モクネンや
其の音なら
もう
開け
ても
いいヨ





一つ缺けたるもの

法語感話

伊藤宏天

學生時代の思ひ出であります。求道の念い

よく切なりし頃と云へば、随分と殊勝にも

聞えるが、或は、名利の思ひに浮身をやつし

て居たかも知れませぬ。住職地の近くのお内

で、家庭紛議が起りました。其の事件に就い

ては始めから、少なからぬ心配をし、手間と

暇とを費やして、出来るだけの盡力をつくし

たつもりなのであります。お禮を云つて貰つ

たから何うと云ふのでは無いが、マアこちら

の好意は受けて頂けるものと思ひきや、其れ

が、全く反對で、其のお宅では、私が紛議の

張本人であるかのやうな誤解なのです。

無論、其れに就いては、條理を盡して説いて

見るのですが、謂ゆる先入主とでも云ふので

せうか、少しも領解して呉れませぬ。後に

は、何か爲にせんとて、故意に曲解して居る

のでは無いか知らと思へる程までに、反對に

反對にと迫つて來られるのです。私は困りま

した。怒りました。惱みました。打すて置

かうかと思ふのですが、其れが續でネ。何う

しても氣が済まぬのであります。如何でせ

う。誌友諸兄姉の中に、斯うした経験のおあ

りになる方は御座いますまいか。隣間の間に

り其れの大要案なのです。年は若いし、向ふ

意氣は強いし、と云つて立てつくには先方の

存在が大き過ぎます。泣き寝入るには腹の虫

が承知しませぬ。斯うした場合、諸兄姉には

何う處置なさいますか。

私は、遂に意を決して、日頃、教室の講義

を通じて敬慕して居る、某教授の膝下を訪れ

ました。其の教授とは今日に於ては、親子も

たどならぬ程に、表裡共に御教導を頂いて居

りますが、實のところ、私的に直接に膝づめ

で、話しかけたのは其の時が初めてなのであ

に於てでも、假令、直ぐに忘れて仕舞ふにしても、彼奴、人を馬鹿にしやがる。人が此れほど親切にしてやつて居るのに」とと癪にさはつたことが二度や三度は有るのでは御座いますまいか。私のほつま

は其のためです。其れ程、又、其の時の姿が、今も尚ほ、思ひ出せる位、強く印象づけられて居るのであります。國家の紛議は、世間にザラに有り勝ちの事であつたにしても、私に取つては、一生を通じての、よき師に廻り會へた、よい機縁であつた事を思ふと、いつまでも其の問題の當事者に合掌させられます。其の内の一人は既に早く亡くなられ、他の一人も何うで御座いませうか。音信不通で様子は解りませんが、皆、善智識であつたと感謝させられます。

偕て、某教授を訪れた時のお答へです。大變、前書きが長くなりましたが、本論は其の時のお答へなのであります。

順序として一往、事件の内容を話しました。默然として終始聞いて居られた教授は、「此の遺る頼ない心持ちを如何に處置すべきでせうか」と、話を打ち切つて教授の顔を見たら、教授は唯一言、

「惡しきをば我が分と見て」
たゞ其れつ切り、師語らず弟子間はず、沈黙

は續きました。二分、五分、師は弟子の重ねて問ふを待つて居られたのかも知れませぬが、弟子に於ては更に問ひ返す勇氣が無かつたのであります。否、或ひは、一語釋然、既に重ねて問ふ必要が無かつたのかも知れませぬ。弟子の兩眼からは次々と涙が流れて仕方が御座いませぬ。悲憤の涙か、慷慨の涙か、否、々、懺悔の涙、感謝の涙であります。其のまま默禮したゞけで、私は教授の許を辭しましたが、

「惡しきをば我が分と見て」

禪宗では、是れを三十棒と云ふのか知りませんが、悶々として、もつれもつれて暗くなつて居た私の胸の闇を徹照した、謂ゆる大光明なのであります。

もつれは相當長かつたのであります。其の間にはたゞの一度も「惡しきをば我が分と見て」の法語に氣づかなかつたのがウ、カッです。ざりとて知らぬ御法語ではありませぬのに。

御法語の前後をくわしく致しますと、勅修

御傳は第二十一卷、上人つねに仰せられける御詞の、劈頭第一に載せられて居ります。

「口傳なくして淨土の法門を見るは、往生の得分を見うしなふなり。其故は極樂の往生は上は天親龍樹をすすめ、下は末世の凡夫、十惡五逆の罪人まですすめ給へり。しかるをわが身は最下の凡夫にて、善人をすすめ給へる文を見て、卑下の心をおこして、往生を不定におもひて、順次の往生を得ざるなり。しかれば善人をすすめ給へる所をば善人の分と見、惡人を勧め給へる所をば我分と見て得分にするなり。斯くの如く見定めぬれば、決定往生の信心かたまりて、本願に乗じて順次の往生をとぐるなり。」

この一段の要を約して、教授は

「惡しきをば我が分と見て」

と私に口傳し給へるものと感じました。

「口傳なくして淨土の法門を見るは、往生の得分を見うしなふなり」の初句は、たゞ其のやうに解釋したらよいのですが、口傳の二字

を色々な角度から吟味すると、いよいよ有難くなります。正しく當時の私に取りまして、前々より此の一段の御法語は、殆んど暗記にも等しい姿で、知りつくして居た筈のものですのに、教授の口傳に接するまでは、全く其の得分を見失つて居たのであります。

わざを行ふ時のコッ、按摩する時のツボでりませぬ。ツボにはまらぬ按摩は迷惑だらうと思ひます。師匠とし、指導者としては、このコッ、ツボを早く悟らせる必要がありますが、これが又、云ふて教へられるもので無い場合があります。私の長男が今中學一年生であります。日課と宿題とで攻められ抜いて居ります。時には睡眠時間にまで食ひ込んでやつて居ますが、健康を案じる親として、上手に勉強しなさい。勉強にコッがあるからと教へるのですが、偕て、其のコッの説明となると、何う説いても、うまく云ひ表せませぬ。結局は自分で縋み出して呉れるより仕方が無いからと思つて居ります。口傳しますけれど。

れど。

淨土の法門のコッとして

「悪人を勧め給へる所を我分と見て」

と、法然上人は常に仰せられ、更に、我が教授は其れに従つて

「悪しきをば我が分と見て」

と、私の惱みを綺麗に拭ひ去られたのであります。何返も讀み知り、聞き知つて居たので

すが、この口傳にあつて、まるで夢の醒めたやうに、道は新しく展開しました。ハッキリ

と教へが我がものになつたのであります。大抵の場合、お互ひは、するだけの事はして居る。やるだけの事はやつて居る。別にこちらに悪いところは無い。と主張するのでは無いでせうか。そして其の云ふ、するだけの

事、やるだけの事の標準を何所に置いて居るか調べて見ると、隣り近所の園子の勢較べで、大した手柄にはならぬのです。なぜ、天

の普く覆ひて誇らず地の一切を載せて倦まざるが如くと、標準を大きくせぬかと、今から

こそ云ふのですが、當事者としての自分では一向に其所へ氣がつかぬのです。絶えず先德

聖者の言行に倣がれ、其の芳觸を慕ひ度いものであります。

斯う書いて居るところへ、届けられた某印刷物に「未來の大波」を通じて見るアメリカの深き反省と題した、飛行家リンドバーク大佐の論文を抄譯した一節の載つて居るのに目が着きました。

「アメリカは自から正義の國であると自信して居る。さうして其のアメリカの世界に對するものは皆惡魔の如く思つてゐるのは果して正しいことであらうか。

(中略) アメリカは世界平和のために努力をこらして居れ、決して世界のために悪いことをして居らぬと云ふ自負を持つて居るが、最後にたゞ一つ缺けたところがある。しかもこの缺けたところが

現代の禍ひの根元となつてゐるのでは無いか。

樹々は春から夏にかけて葉を茂らせ、天の命するままに素直に生きて居る。而

して

して

して

も一度秋が来ると其の大切な葉をすべて振ひ落して眞裸になつてしまふ。アメリカはイギリスと共に世界に於ける持てる國として恵まれて来たのであるが、其のほかに持たざる國として、多年其の惱みをつゞけて来た國がある。その持たざる國が、今武器を持つて立ち上つたと云つても、それを直ちに惡魔の如くに云ふのは間違ひである。其の立ち上つた内部にあるものに未來の大きな問題が含まれて居ることを見のがしてはならぬ。一陣の嵐、一滴の露と雖も人間の方でそれを何うすることも出来ぬ。たゞ其れを如何によく導くかが人間に與へられた智慧である。枝一ぱいに茂らせた木の葉を、秋が来ると惜しげもなく散らしてしまつても、また春が来れば葉は芽ぐんで來るのである。アメリカは今その持てるものをいさぎよく失つても、それが神の意志であるならば、それが眞に生きる道であることに氣づかねばならぬ。

何も悪いことをしなかつた青年が、たゞ一つ缺けて居たがために永遠の道をつぐことが出来なかつた物語りに深く思ひをひそむべきである」と。

問題が全國民衆思の中心に觸れて居るだけに興趣も亦大きいのが「たゞ一つ缺けたるもの」の句は、私、胸の古きずさをさぐられるやうな氣がして微笑を禁じ得ませぬ。定めし同感の士も多からうと思ひます。

やるだけの事はやつてゐる。するだけの事はして居る。何一つ悪いことはして居ない。其れなのに……事件に觸れて、嘗つて私の惱みつづけた根本は其れでありました。他をとがめることを知つて、自から深き反省が缺けてゐました。

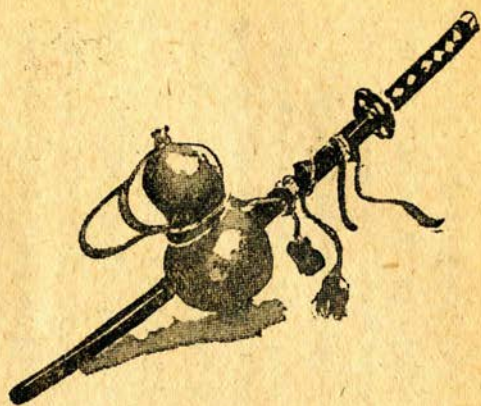
「悪しきをは我が分と見て」
我れ悪しみの深き反省に立つて、聖法然によつて開示された永遠の道を繼ぐ可きであります。

最後に一つ田園の畦話を提供します。現下都市の話題の一つが米（コメ）であるやう

に、農村が主力を注いで居るのが米の増産です。然し、肥料は不足がち、動力も不足がち、百姓は文字通り懸命に働いて居ります。が、其れに就いて、よく農民が云ひますのは「あの田は悪い、この田も悪い。米の出来ぬのは田が悪いのだ」と。事實、多少は其れもあるらしいのですが、隣家の親爺が憤慨して云ふのです。

「田が悪いのではない、我が悪いのだ」
親爺の云ふのは無論文字通り「田」なのです。が、私は其れを「他」に通はせて「他が悪いのでは無い、我が悪いのだ」と説教いたしました。面白いではありませんか。

田が悪いと云つて、田に難癖つけて、努力しない我が悪いことを知らぬ人があるのかも知れませぬ。親爺は此の次の常會に話してやるのだと頑張つて居ります。常會と云へば街の常會が不平のならべ會になつて行くとか風聞します。其所にも「一つ缺けたるもの」の説教が要るのでは無いでせうか。



小 説

瓢

簞

三 宅 連

「國元を出てから何年になるかなあ。」重兵衛は言ひながら何かを思ひ出したらしく目を輝かせた。

半太夫は筋骨隆々とした頭丈さうな背に目をやつて、

「早いものだ、丸四年だよ。丁度五年前の夏だつた。貴殿の家の裏の方の田圃で水雞が啼いてゐたからなあ、そして、君は家中評判のお杉殿と結婚したばかりだつたね、ハハハ！」

「こいつだね。」と、桃色の肉を覗かせてある灸跡に蓋を張つた。その時、左の肩甲骨の下に矢傷らしい痕を認めた。

「半太夫は笑つて何か言ひ續けようとしたが、平生、冗談を言つては人をからかふ半太夫の癖を重兵衛は苦々しく思つてゐたので、

「オヤ、これはどうしたんだ？」半太夫は人指指で褐色の傷痕を突いた。

「それは……」重兵衛が説明しかけた時、半太夫は何氣なく、

「逃げ傷だな。」と言つて笑つた。

ふと思ひ出したやうに、厚紙を裂いて灸蓋をこさへると、浴衣を脱いだ肩をくるりと半太

重兵衛の顔がサツと變つた。

夫に向けて、

「逃げ傷」とはなんだ。冗談にも程がある、容赦出来ぬ難言だ——重兵衛はクヌツ

と涼を入れてゐた。庭の植込みで蟲が啼いてゐた。

「頼む」と灸蓋を渡した。

と唇を噛んだ。

武士に向かつて逃げ傷云々は最大の侮辱であつた。

「おのれ、一と討ちに……」重兵衛の心は逸

つたが、今、此場に、それが逃げ傷でなくて、國もとの狩場で大猪を追ふた時に受けた流れ矢の傷である事を證明する證據がなかつた。

歸國迄待たねばならなかつた。

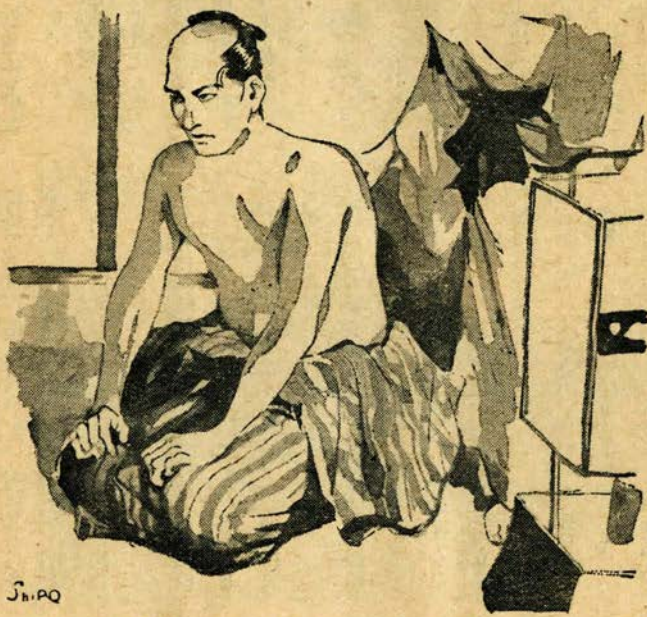
「有り難う。重兵衛は何食はぬ顔で言ふと、浴衣を肩に着た。

背に向かつてゐたので、半太夫には、さつきの重兵衛の顔色の變化には氣が着かなかつた。まして、重兵衛の心中の出来事には氣着くわけがなかつた。

歸國したら背の矢傷を治療した外科醫を證人に、事の黒白を決した上で、半太夫と尋常

に果し合ひを試みる決心を、重兵衛はしたのであつた。

「御武家様、御飯の用意が出来ました。」女中



J. H. P. Q.

が其の頃の道程だつた。兩名は番所にこはつて五十石船を借り切つた。

船頭が舟をやらうとした時、子供を連れた武士が走つて来た。

「その船に我々も乗せていただき度い。」

船頭は貸切りである旨を述べてことはつた。武士は六十年輩、頭に白髪を延ばしたいやしからざる人品であつた。子供は十歳位で、色の白い愛くるしい、しかし、何處となく弱々しい男の子であつた。

武士はがつかりしたやうな顔をして、子供の手を引いてあちらへ行きかけた。その様子が氣の毒なので、半太夫は重兵衛と顔を見合せて、船頭に乘船させるやうに命じた。

「先程は貸切りと存ぜず御無心申したが、御許し下すつてかたじけない。」武士は兩名に厚く禮を述べ、子供をいたはるやうにして船に乗つた。その時、又、

「おーい、その船待つて呉れえ。」と叫びながら、三十年輩の油反の包を持つた商人が馳けつけた。商人も乗せてやつた。

が廊下に手を突いた。

伏見からは淀川を船で下つて浪花へ出るの

船は岸を離れた。やがて淀の小橋を過ぎた。水車の音が聞こえて来た。

半太夫は酒が好きであつた。重兵衛も半太夫程ではないが嫌ひではなかつた。

彼等は吸筒を取り出した。水車の音を肴に盃を重ねるうちに、子供連れの武士も商人も彼等に加はつた。涼しい風が吹いて来た。

商人は包から瓢箪を出し、懷から山椒の小包を取り出して、チビリチビリと獨酌をやつた。

武士は謡をうたつた中々よい聲であつた。許されて商人も小唄をうたつた。うたひながら彼の目は時々ギラリギラりと光つた。座は賑かになつて来た。

既によい心持に酩酊した半太夫は「これに限る。」と大盃を取り出して重兵衛にさした。既に眞赤になつてゐる重兵衛は、

「いや、もう、充分だ。」と手を振つた。

「なあに、よいではないか。」半太夫は強ひた。

「これ以上はやれぬ。此の盃は彼の商人へ

「又、逃げ給ふか。」半太夫が笑つた。重兵衛はカツとなつた。

「岡崎での逃げ傷と言ひ、又、此處での只今の難言、もう勘弁ならぬ。いざ、尋常の勝負に及べ。」彼は大刀をひきつけて半太夫を睨むだ。

半太夫は岡崎でも此處でも冗談に言つたのであつたが、かくなる上は、其の頃の武士として冗談ではすませなくなつた。勝負を挑まれて逃げるわけには行かなかつた。

「心得た。」刀を取らうとすると、確かに傍に置いてあつた筈の刀が無かつた。

それは備前のもので、半太夫には過ぎものだ。」と家中の口の悪い通中に噂された程立派な代物であつた。

「刀がないとは思議だ。出て来る迄待つから、落着いて探し給へ。」重兵衛は言つた。

あちこちたづねたが刀は見當たらなかつた。武士たるものが試合に際し、刀が無いでは一分がたたなかつた。

半太夫は武運の盡きだと思つた。此の上は

自害するより他は無いと思つた。すると、さつきから二人の様子をじつと見詰めてゐた子供連れの武士が、

「刀のありかは私が心得てゐる。教へて進じましょうが、私の願ひを御諾下さるか。」と言つて二人を見くらべた。

「勿論で御座る。」承知仕る。」兩名は同時に叫んだ。

彼の武士はツカツカと商人の前に行つて立ちをだかると、グツとねめつけながら、

「刀を盗んだのはこやつでござる。」
「めつ……めつさうも無い。何の證據があつてそんな事をおつしやるか。御武家様とは言へ聞き捨てならぬ御言葉。」商人は眞縁になつて怒つた。だが武士は落着いて、
「先刻、長緒のついた瓢箪を出して山椒をつまんで居つたが、その瓢箪を出して見なさい。……さあ、その瓢箪を出して見なさい。自信たつぷりに詰めよつた。」
「その瓢箪は……」商人の顔は見る見るうちに青くなつたが、いきなり、身を躍らせる、

ドブと水音を立てて川の中へ飛び込んだ。

一同はハツとして水上を見たが、只川渡の立つのが薄明りに見えるだけであつた。

間もなく夜が明け放れたので、此處かしこと船を返して見ると、鵜野の蘆の中に、ボツカリ瓢箪が浮いてゐた。瓢箪はどうしたのか浮いてゐるだけで流れなかつた。これは不思議と船を漕ぎよせて瓢箪を上げて見ると、長緒のさきに刀が結びつけてあつた。果してそれは半太夫の刀であつた。

半太夫は刀をおしただき、武士に厚く禮を述べると重兵衛に言つた。

「長い間待たせてすまなかつた。さあ勝負致さう。」



「ウム。」重兵衛は刀を抜いた。その時「待たれよ、御兩人。」と、子供連れ

の武士がすつくと立ち上つた。

「刀が出たら願ひを諸くと言ふ約束であつたが……」武士は威のある語調で續けた。此の勝負は私に御預けを願ひ度い。——御二人とも同家中と見受けるが、君達の命は御主君に捧げたもので御座らう。御主君が高祿を與へて諸君を抱へて居らるるも、一旦事ある場合、戰場で役に立てたい爲である。諸君の命は諸君の物であつて諸君の物ではない。私上の争ひのためにその尊い命を無駄にするのは御主君に對し不忠では御座らぬか。」

武士は諄々として公私の別を説いた。

半太夫も重兵衛もいつか武士に頭を下げてゐた。目のさめる心地がするのであつた。

「よく分りました。」と言つて、彼等は武士の顔を仰いだ。

「分つて呉れたかたじけない。」

武士は二人に名も告げずに、子供の手を引いて去つて行つた。

寺院 巡り 大本山 黒谷

金戒光明寺に詣づ

北 城 生

あれが黒谷

「只今から黒谷を案内するから早く京都驛の廣場に出て下さい。」

東の方、南北に横はつた常緑の連峰が手に取る様に見える。山陽が「東山三十六峰」と云つたのがそれで、北の方へつさるあたりに如意ヶ嶽(天文字山)があり、更に日本佛教の源泉の靈峰比叡が巨體を横たへて昔を夢見てゐる。此如意ヶ嶽の前方に碗でも伏せたやうにポツツリした小山があつて、峰に塔の屋根

が一寸顔のぞかしてゐる。あれが黒谷で昔は中山と云つて此のあたり白河の區域であつた。が今は黒谷で通つてゐる。此處に四大本山の一たる黒谷本山が、宛も京都を見護るかの如くに默視してゐる。

黒谷の素描

市電を利用して黒谷前で下車し、北へ歩いて左折すると二分程で高麗門に達する。「くろ谷」の石標は此前に建てられてゐる。之から所謂黒谷境内で三萬三千坪、明和九年九月の

關西大風害で枯損したとは云へ、尚ほ老松古檜が鬱蒼としてゐる。中を四十間程石疊を行くと、左手の磴道の上は高く三門がある。大きくもなく小さくもない誠に格好能く、ドッシリとした感じの山門で「淨土真宗最初門」の勅額に自づと頭が下る。更に磴道を上ると、右に經藏、阿彌陀堂、觀音堂を見、左に浴室、鐘堂、茶所等があつて、正面に御影堂(目下素屋を建てゝ建築中)がある。普請中のことゝて廣場一面使用されてゐるため餘り目立たないが、其前脇に樹齡六百餘年と云はれてゐる巨松が思ひ切つて枝を張つてゐる。「紫雲の松」と呼ばれて「熊谷鑑かけの松」と相對してゐる。黒谷最古の存在で、幾多の變遷を物語るかのやうであるがそれを聞きたる靈能のないのを悲しむ。御影堂の東に大方丈(昭和十二年再建落成)清和殿が棟を並べてゐる。大方丈玄關前の車坂を降りると蓮池、熊谷堂、一寸斜に登つて勢至堂があり、更に磴道を登ると一番高い所に文珠塔、其北一丁程に紫雲石がある。

此山の入口には各々門があつて
南門、北門（總門）と區別されて
ゐることも此山の特徴で、見よう
によつては立派な城廓である。昔
は六十の寺庵があつたと云ふが今
は二十ヶ寺の塔頭が或は門に或は
伽藍に前後左右に居竝んで、堂々
たる本山の格式を保つてゐる。

淨土宗最初の道場

其昔源平の戦ひを他所に、只管
出離の要道を求め、學究された法
然上人が、四十三歳の春末代の凡
夫も彌陀の願力によつて、悉總で
の者が救済さるゝことを知り、立
所に難行難善を捨てゝ専修念佛の
一行に向つて、邁進の首途につい
た。

思へば十八歳の時から今日迄二十有餘年
間、雨の日も風の夜も、苦樂を共にした叡山



西塔の黒谷（今の青龍寺）を去つて、自ら究
めた新佛教、大衆的平民佛教たる念佛を弘め

んために都に降つたのである。

上人の心の裡はどんなに輝いてゐたこと
か、蟬の最も大切にされてゐた殻を脱ぎ捨て、
然もそれに一瞥をもくれず、大宇宙に向つて
飛超する如くに、智慧第一の法然房と讃えら
れた上人が、一切の智慧を捨てゝ愚痴の法然房
に還り、身には麻の衣に金剛草履をはき、新
天地に向つて飛躍する雄々しい姿、思ひ浮べ
ても胸がスツとするではないか。

燃えさかる希望を胸に秘めて、白河の中山
に通るかゝつたとき、今を盛りに咲き亂れて
ゐる藤の花の下に巨石に憩ふた。其時不思議
や紫雲あたりになびいて、目も眩む光り
が、黄金色に輝いて來たではないか。オ、此
嚴肅なる大自然の莊嚴、何たる奇瑞か、小枝
に啼く小鳥の聲さへ常とは違つて居るではな
いか。此奇瑞に包まれ、此靈感に觸れた上人
は、思はず南無阿彌陀佛と、聲高らかに唱へ
た。吁これこそ萬民普益、下化衆生の第一聲
であつたのだ。

上人は此靈光に觸れ、是こそ有縁の地なり

と雀躍され、此處に草庵を結んで白河禪房と名付け、専修念佛の道場となされた。實に承安五年の春である。

法然の珠數もかゝるや松の藤（蕪村）

とは蓋し此邊の消息を表はしたもの歟。

更に紫雲光明の瑞相を感じた靈石を紫雲

石と呼んだ。今現に山上に一小堂宇があつて

道晃親王の扁額を掲げ、其中に靈石がある。

本尊には法然上人四十三歳石上の像が安置さ

れ、六阿彌陀「六ヶ處の阿彌陀」に參詣する

には始めに最初の法然上人に參詣せねば効が

無いとて毎月出日は特に參詣者が多い。

實に之れ淨土發祥根元の地であり最初の道

場である。

寺號と「黒谷」の由來

白河禪房に教筵を布いて、新佛教弘通に餘

年無かつた上人の下に、自己の深い惱みを抱

いて教へを請ふ者が日に／＼増して來た。夫

等の求道者は「法然上人」だ「源空上人」だ

と申上ぐるのが餘り不嫌でもあり失禮でもあ

ると思つて誰云ふとなく黒谷（叡山の）に居

られた關係上地名を其儘「黒谷上人／＼」と

云ふやうになつた。又それが上人のお徳をき

づ／＼ない無難な尊稱でもあつた。所が此黒

谷上人の居住地である中山を誰云ふとはなし

に、何日の頃からか（餘り古くはなり）黒谷

と呼ぶやうになつた。勿論叡山の黒谷と區別

する爲に「新黒谷」と呼ばれてゐたが、年經

つに從つて、たゞ單に黒谷と呼ばれる様にな

つた。

さて白河禪房であるが信空、湛空と代を重

ね五代の圓智上人の時、始めて佛殿、御影堂

が建立されて、後宇多天皇から、紫雲山光明

寺と寺號を賜はつたのである。其後、後光嚴

天皇は、八代の運空上人に圓頓戒をお受け遊

ばされたに及んで、畏多くも「金戒」の二字

を冠らす様にとの御沙汰を賜はつた。それ以

來「金戒光明寺」と呼ぶに至つたのである。

序ながら、十代の等親上人の際後小松天

皇から畏くも「淨土眞宗最初門」の勅額を賜

はつて現に三門に高く掲げられてゐるが、之

で淨土宗最初の道場であることに烙印づけら

れたわけである。

黒谷の隣りは白し蕎麥の花（蕪村）

と云ふ時代が過ぎて今は左京區黒谷町大本山

黒谷金戒光明寺がそれである。

信長秀吉等と諸堂宇

天正年間信長が制狀を寄せられ、秀吉は

朱印を以て寺領百五十石を寄進さるゝ等將軍

の歸依亦淺くなかつた。

其後秀頼は阿彌陀堂を再建された。今日で

は最古の建物となつてゐる。本尊阿彌陀如來

は惠心僧都最終の作で、彼が一代彫刻に使用

された器具を腹中に納めたので「乙女如來」

とも「鑿納メ如來」とも云はれてゐる。

秀頼は其後御影堂が焼失したために是をも

再建された。法然上人のお木像も焼失したが

家康の命に依つて、上人自作七十五歳のお木

像を、安藝の光明坊から遷座した。昭和九年

四月火災に罹り現に新體制下にあつて再建に邁進してある。

觀音堂も徳川の命に依つて吉田から此處に移されたもので、本尊觀世音菩薩は行基の作で、安産守護の佛として、維新前迄は宮中に於ける御懷妊の節は勅使をもつて御祈願を籠められた靈像で昨午國寶に指定された。

經藏、鐘堂、茶所等々夫々特徴と由緒とを持つてゐることは云ふ迄もないが、是等は他日に譲つて、文殊塔に參らう。

春日ノ局が寄進したと云ふ極樂橋を渡つて正面の高い石段を登り詰めると三重の塔がある。本宗寺院で塔のあるのも珍らしいが、果々たる幾萬かの墓碑の中に在るに至つて更に妙と云ひたい。墓と云へば黒谷墓地は日本三大地の墓一で、御影堂を中心に東北西と區別され、幾多名士墨客の墓碑がある。文殊塔は其東墓の中に在る。本尊文殊菩薩は運慶の作で、是亦徳川幕府の命に依つて此處に移され、秀忠菩提のために宗如と云ふ者が三重塔を造營されたものである。

此あたりから市中を展望すると特に妙で、秋の日など遠く山崎方面が指呼の間にある。

熊谷と其遺跡

義經の麾下に勇將熊谷次郎直實がある。一の谷に平家を攻めて經盛の末子無官大夫致盛を討取つて精神の大轉換をしたことは餘りにも有名である。

彼は世の無常を痛感して黒谷上人の禪室を訪ふたのである。彼は自らの手足をきらずとも如來の本願にすがつて救済さるゝことを上人から聞かされて男泣きに泣いた者である。彼は更に入門の許しを得て雀躍し、幾多戦場の塵や血眼に汚れた鎧を脱ぎ池の水で洗つて松に掛け乾かしたのである。「鎧の池」鎧かけの松」として今に傳へられてゐるが又永遠に傳へられるだらう。

新入道蓮生は白河禪房の畔に草庵を結んで専修念佛に餘念無かつた。時に觸れキビ餅等擲いて上人に御供養したが其日や杵が惜しいと

とに七年前の火災で焼失した。今の熊谷堂が草庵の跡で、之亦先年の大風害に罹つたが新築された。本尊は阿彌陀如來の座像で、脇壇

に法然母衣絹の影像を安置してある。この影像は法然上人五十三歳の時直實と師弟の縁を結んだ記念に、上人自ら鏡に映して母衣絹に圖して彼に與へたもので、直實の單信が偲ばれて嬉しいではないか。彼は後關東へ行つて念佛者らしい大往生を遂げたが、誰の建立か勢至堂前に直實と敦盛と相對して供養塔が建てられてゐるが敵も味方も一蓮托生で直實の氣持ちがピッタリ出てゐてうれしい。

最後に所藏の寶物什器、繪畫古文書の類だが紙面の都合上一二を照會して置く。

一枚起請文、後柏原天皇、「一枚起請文、然上人直筆」と表題御宸翰を賜つてゐる。

一、休禪師贊「傳聞法然生如來、安座上品蓮華臺、尼入道同無智輩一枚起請最奇哉。」

鏡御影上人自ら鏡に照して修正されしもの
山越彌陀三尊國寶惠心僧都の筆

會員通信

お念佛と日華親善

いま菩薩と崇らる

會員 船橋そめ子さん

あの日のこと天津寺に一人の中國人が訪れて來ました。彼の生れは上海で、現在は天津浪速街積善西里に住んでゐるといふことです。そして話がたまたま浪速街の三信洋行のことにわたつたが、その時、彼は急に態度を改め口のききかたも丁寧になつたので、尙よく話を聞いてみると、中國人の間で三信洋行の奥さんが「いま菩薩さま」であると云はれてゐることが判りました。

その話によれば、三信洋行の奥さん——船橋そめ子さん（本會々

員）は毎日木魚をたたいて南無阿彌陀佛々々々と稱へてゐるさうです。そしてお念佛を申してゐるためにあれ程やさしいのであらうと思はれてゐるさうです。この中國人の言葉をかりれば「奥さんは菩薩さまと同じことです。私たちのやうな苦力階級にもまた大人たちにも全く同じやうに振舞つてくれます。あんなに優しい日本人があるのかと思ふと、日本人に使はれるのが何んだか嬉しいやうな氣持ちがします。奥さんがあれ程優しいのはお念佛を申し

てゐるからだと思ひます。菩薩さまのやうな大慈大悲の氣持になるには私たちもお念佛が一地番切なことであると思つてゐます。」と云ふことでした。生活程度の可成り低い苦力たちまでを完全に尊敬させ、廣く中國人から「いま菩薩」とまであがめられてゐる船橋そめ子さんは全く誠意の人で、このやうな人がつてこそ初めて日華親善の效果があがるものと信じます。それと同時にお念佛を申す有難さもつく／＼思はれるのです。このやうな話を聞くにつれ、私達は勇躍歡喜してお念佛を申したことでした（天津、安部觀道）

本所部擧げて維持會に加入

東京教區江東組本所部の淨土宗

◇諸先生の御執筆を拜讀させていただきますまして早や半年を過ぎました。思へば兄が廣島陸軍病院で養生中、皆々様の御厚情に接し、その時兄が私に突然送つてくれた「淨土」が御縁で、只今では法悦にひたり感謝の生活を送つてをります。佐藤春夫先生の阿彌陀さまはほんとうに嬉しく思ひ、今まで意味もよく判らずに唯父母と一緒にお念佛を唱へてゐましたのが申し譯ないやうに思はれてなりません。（旭川市緑町岩崎こしゑ）

◇毎月「淨土」が慰問として當院にも贈られてゐる由聞及びました。が、患者数も多く全部には行渡らず、久しぶりに貴誌を手にして同室患者と宗教を語る根據を得て喜ばしく、今後大いに法味體得いたしたく存じてゐます。

（大阪陸軍病院外科 實田正道）

寺院住職各位は、この程同部齋藤種山、藤井龍雄兩氏の幹旋勸誘によつて全部擧つて本會維持會員となられました。尙本會維持會員は本會の活動資金として一口金三十六圓を寄贈して下さる方々を以て組織され、同會員は終身會員として機關誌「淨土」の無料頒布を受け

本會支部に改組の

本所區法郷會 第一回講演會を開催

東京市本所區横川橋附近の在郷軍人會及び國防婦人會の會員諸氏により組織されてゐる法郷會では、これまで毎土曜日に同區横川橋龍興院に於て書道講習會並に修養會を開催し主として青年が中心となり眞摯な修養を續け來つたが、今度藤井龍興氏の幹旋で法然

るものであります。因に右新會員の芳名は次の通りであります。

華嚴寺大澤信我、靈光寺大河内義契、淨心寺細井好道、吞龍教會所吉岡信道、同向院細田大信西棲院日比野弘道、龍興院藤井龍雄、德壽院橋本俊榮、靈山寺岩崎敏玄、靈性院齋藤種山

東京市本所區横川橋附近の在郷軍人會及び國防婦人會の會員諸氏により組織されてゐる法郷會では、これまで毎土曜日に同區横川橋龍興院に於て書道講習會並に修養會を開催し主として青年が中心となり眞摯な修養を續け來つたが、今度藤井龍興氏の幹旋で法然

授佐山學順師が講師として出席し、大谷玄旭、齋藤種山、赤尾光雄氏等六十餘名の會員が集まり、佐山師の講演が終つてから新年會福引、生談、書初展覽會等を行つて同時盛會裡に散會しました。尙藤井氏は次の如く感想を語られました。

「これまで法郷會では大谷玄旭先生の指導のもとに書道を學び、それと同時に修養に努めて來ましたが、今度法然上人鐵仰會と合流して支部となつたので、修養について一層便宜が與へられ感謝してゐます。會員諸氏は何れも若い方々であり、皆熱烈に法を求めてゐるので今後は機關誌淨土を師とし、これを中心にいろいろ研究したり、生談をしたりしてお互に修養に勉めてゆきたいと考へてゐます。云々」

◇札幌の近くに經川と申す所ありこの地に小生の叔母が藥師堂の講中の世話人をいたしをり、この叔母は「淨土」をみて大層感謝讃仰いたし、是非同講中に支部を結成し、宗祖を鐵仰したいと希望してゐます。而して只今支部結成も着々進行いたしをり、何卒御指導の程を願ひます。小樽市若竹町、齋藤光弘

◇今や淨土の總安心を言葉として語りながら淨土の總安心の貧困に悩んでゐる。宗祖の安心は莊嚴華麗なる立體信であり絶體信である。大火三千大千世界を包むとも誕生の目的を實現すべく突撃せよと宗祖は叫ぶ。鐵仰會には宗門安心の自然的統一と自然的宗勢擴張の使命がある。淨土」誌よ、三十萬部突破へと進軍しようではないか。(長崎縣島原市、安藤拜)



佛教
修養

お授戒の受け方

中 村 辨 康

(一) 「戒」と「律」

人が人らしく生活する爲に最も必要な修養を、佛教では「お授戒」と云つて、一週間の特別な期間の間に、その中心とするところのものを把握せしめる。

この「お授戒」の「戒」は生活規準のことで、釋尊は御生涯中に各所で五百回以上も此のことをお述べになつたと傳へられる程、重要視されたものである。

ところが多くは「戒」と「律」とを混同して居る。然し事實としては「律」は教團内部の規約であつて、教團外の人には適用しないのである。また「戒」は人が人らしい生活をする爲の信念とも云ふべきものであつて「律」よりも

もつと根本的なものである。だから「戒體發得」と云ふ言葉が示して居るやうに「戒」の體は一である。たとへ「戒」と云ふ文字がつかつてあつても、それが箇條書になつて居るならば「律」であつて「戒」ではない。但し「律」も「戒」から流れ出でたものとして「戒」と離れて居るものでないのは云ふまでもない。

(二) 我國の「戒律」の變遷

我が國に於ける授戒は初めは「三歸戒」だけであつたが聖武天皇の御時支那から鑑真和尚が招かれて、東大寺（後に筑紫の觀世音寺と下野の藥師寺とも置かれた）に戒壇が出来て「戒律」としてのお授戒が始まり役人は皆な授戒

しなければならなかつたのである。それは「法華經」に基いた「三聚淨戒」であつた。三聚淨戒と云ふのは

一、攝律儀戒——威儀——律儀(まじめに)

二、攝善法戒——修善——傳法(よく生き)

三、攝衆生戒——度生——渡生(よく働く)

のことで一に「菩薩大戒」とも云はれて居る。

處が桓武天皇の御時、傳教大師が鑑真和尚の持つて來た書物に依つて、天台大師が此の三聚淨戒を圓頓の思想で説いて居るのを知つて、戒は是非それで行はなくてはならぬと思ひ、幾度か陛下に御願ひして遂に渡唐し、道達和尚から圓頓菩薩戒を受けて延暦二十四年に歸朝したが、桓武天皇御崩御の後に入洛したので陛下の御靈に御報告の授戒をなしたのが我國特有の「贈授戒」の最初であつた。

圓頓戒の「圓」は圓滿で、何時でも何所でも誰でもと云ふことであり「頓」は頓即で、今直ぐといふことである。

即ち奈良朝時代のお授戒は俗人の戒、僧侶の戒、尼僧の戒と云ふやうに「律」の方に重きが置かれて四衆の區別があつたのを、傳教大師は「戒」の眞精神を重視し、僧俗男女を問はず、一様に凡てが打つて一丸となつて、當時行詰つて居た各人の生活を建直して、誰でもが何時でも何處でも

今直ぐに正しい生活をなし得るやうにと、即ち今の言葉で云へば「大政翼賛臣道實踐の新生活」樹立を意圖したのである。それで日本國中の凡ての者がこの圓頓戒を受けるやうにと、叡山に大戒壇を設ける事を朝廷へ御願ひしたのであつたが、南都の反對が極めて猛烈であつた爲に、遂にその御沙汰がなく、入寂後「追善」の意味で漸くに勅許されながら、主張者の眞意は現はれずに唯だ祕密に師匠から弟子へと相傳されることになつて眞意義を失つてしまつたのである。無論叡山の學徒は何れも此の圓頓菩薩戒の相傳を受け公卿殿上人もその志に従つて授戒し得たものではあるけれども、段々密教が盛んになるにつれて、授戒そのものも「神祕な儀式」として取扱はれ「除災消病の效あり」とさへせらるゝに到つたのは誠に遺憾なことであつた。

天台の第二祖慈覺大師から八代目の戒師として相續した叡空上人は學行兼修の大徳と仰がれ叡山大衆の尊敬を得て居たが、その叡空上人から慈覺大師の九條の袈裟と共に第九祖として戒を相傳したのが法然上人であつた。

言ふまでもなく法然上人の宗教觀は誰でもが救はれて行くものであつて、然かも何時でも何處でもなし得らるゝものでなくてはならぬと云ふことであつたから、自然「戒」

もまたその建前を取り傳敎大師の眞意を再現することになつた譯である。

從つて圓頓戒は法然上人に依て初めて眞實なものになつたと云つても敢て過言ではないのである。

天台流の諸法實相の理に即して行く生活規準に對しては異論すべき處もないが、然しそれでは餘りに理に走り過ぎ「誰でも」と云ふわけには行かない。之れを「南無阿彌陀佛」の唱名の中に「五逆十惡の者も救はるゝと信じて、しかもなほ小罪をも犯さじ」と思ふ念佛の「信行」にまめられて行くことこそ、本當の「戒」の精神に合致するもので、念佛に依つてのみ「誰でも何時でも何處でも今直ぐに」の「圓頓大戒」の實踐が出来るものである。

淨土宗に授戒のあるのはかゝる經過に依つたものであると共に、實踐的には淨土宗のみが正統を維持して居ると云つてよいわけである。

(三) 授戒の形式

前述のやうに初めは歸依三寶の「三歸戒」のみであつたが、聖武天皇以後「三聚淨戒」が授戒の中心となり（鑑眞

の戒を天台では權大乘戒とし傳敎將來の三聚淨戒を以て實大乘の圓頓大戒として居る）更に法然上人に依つて「念佛戒」が最後のまとまりとして完成され

一、三歸戒（お剃度又はおかみすりと稱せらるゝもの）
二、三聚戒（お授戒の主なるもの）

三、念佛戒（俗にお日課と云はるゝもの）
の三本建になつたのである。之れが淨土宗に行はれつゝある授戒の形式である。

此の内第三の「念佛戒」は念佛を建前とする淨土宗なるが故に、或はお添へ物か、又は屋上屋を重ねたものの如くに受取られ易いけれども、決してそんな浅い意味のものではないのである。

即ちお授戒の中心である「三聚淨戒」がお授戒の時説明はされても、唯だ成程と思ふだけで實踐困難であり、且つまとまりがつかないから、それは結局謂ゆるお説戒だけで了つて何にもならないのである。このまとまりを付けて誰でもがたやすく正しい生活の出来るやうにすることこそ戒の本意でなければならぬ。このまとまりをつけたものが「念佛戒」であつて、是れに依つて初めて傳敎大師の意圖せられた授戒の眞意義が徹底されたのである。

此の法然上人の「戒」に對する再認識に刺戟されたのか、何うかは分らないが、法然上人以後に於いて、禪宗では「一心戒」を樹て、日蓮宗では「唱題戒」を樹てた。これは佛教史的に見て、日本獨特の發展であり極めて意味深いものであると感ぜられるのである。

(四) 授戒の受け方

授戒は大體一週間で定例である。近來五日間に短縮して行ふ場合もあるやうであるが、亞細亞諸國の中、佛教の行はるゝ國に於ては何れも最短七日間であつてそれ以下と云ふことは見當らない。

先づ某寺で「授戒會」をやらうとすると、受けやうとする人を勧誘する爲に、其の期間の日時と戒師又は勸誡師の名とを誌した帳面が廻る。誰か世話をする人がその帳面を持つて勧誘に来るからそれへ名前と年齢と前にお授戒を受けたことが有るか無いかを記入して申し込み、其の日の来るのを待つのである。若し前に貰つた戒名があればそれを書き添へて御寺へ知らして置く方が便宜が多い。

さて其の日が來るとサツパリした衣服に着替へて珠數と

か袈裟とかお經本とか其他手廻りの品々を持ち揃へて時間前にその寺へ集合する。此の場合「淨衣」ととなへる經帷巾を着る風習のところもある。

時間が來ると「帳讀」と云つて名前が呼び出される。ハツキリした聲で返事をして念佛しながら順次に待合はして居た座敷から本堂への廊下を進むと「香湯香水」と云ふものが出て居て黒塗の盥で手を洗ふやうになつて居るから、合掌の手を開いて仰向けに差し出すと、香湯と香水をにかけて呉れる。それでそこにかけてある手拭で手を拭くと、次に「灌頂」と云ふことをする人が立つて居るから、其の人の前に頭を下げて合掌すると「彌陀心水沐身頂」と唱へながら「瀉水器」から散杖と稱する短い梅の枝で頭に香水をつけて呉れる。それがすむと「塗香」と稱して香の粉を掌にのせて呉れるゆへ兩方の手を合せて掌でもみ合ふやうしてスツカリ手に塗るつけ、愈々本堂の入口に達すると「觸香」と云つて白い象の形をした香爐があり、香烟が立ち上がつて居るので、男は右足から左足、女は左足から右足を香烟にくゆらして本堂へ進むのである。本堂には「座檢」と云ふ役をする人が居て順次に座席をきめて呉れる。全部の人が入堂すれば「開白」と云ふ御經が始まり、それ

がすむと禮拜や御説教が時間割の順序通りに、夕方まで續けられ、其の日一日の行事が展開される。地方に依るとお晝食はお施主があつて供養されるが、さう云ふ習慣のないところではお辨當を持参しなければならぬ。

かうしたことが一週間の中六日間續けられる。但し中日即ち四日目には何か大法要が行はれることもあり、また「懺悔會」と云ふものが何日目かの夜分に行はれる地方もある。

七日目は愈々最後の日であるから前夜に入浴して着物も小ザツバリしたものに着替へ、いつもの通りに入堂するのであるが、此の日は「正授戒」と云つて十二通りの法則に従つたお授戒の儀式があつてシツカリした覺悟を植ゑつけられ、日課唱名の誓約をし「お血脈」が授けられて満了するのである。またお剃度と云ふものを前六日間の中にやることも普通に行はれて居る。

(五) 授戒の心得

授戒は單に儀式としてお授戒を受け七日間お話をきいただけで、あとは何時もの通りと云ふやうな、お寺の履歴か

頂いた「お血脈」は極樂行きの切符か、又は戒名の免狀かでもあるやうに思つて居る人が存外多いらしいが、それは大きな誤りである。本當は「佛子」として佛の血脈を受けつぐことになると思つてほしいものである。

則ち、私達の生活は身體と言葉と心との三つを離れてはあり得ない。その心構へをハツキリと覺悟し、言ふことや、爲すことを、常に佛のやうな親切な氣持で出來るやうにして行くのが「お授戒」の目的である。それが出來るところに「三歸戒」も「三聚淨戒」も素直に實踐され、一億一心の理想國體がいやが上にも充實されるのである。

椎尾博士は「佛法は戒なり戒は教育なり」と言つて居られるが、全くその通りで、本當に國民の一人一人が「戒」を完うするならば、不斷に維新が行はれるのであるから、改めて新體制を叫ぶ必要もない譯である。此の故に本當に國民の一人一人が此の戒を受けて覺醒し我が國をして眞の神の國日本たらしめ、眞の極樂淨土たらしめなくてはならないのである。

然るに戒を受くる者も戒を授くる者も、兎もすれば形式に流れ勝であつたから、法然上人は茲に顧みるところあつて、それを「念佛」でまとめ、念佛生活の中に凡てが丸く

調へられて行けるやうにされたのである。

だから一週間のお授戒に際しては、本當にしつかりした「覺悟」が樹立されなくてはならない。そしてこの覺悟の出來たことを「戒體發得」と云つて居るが、此の戒體を法然上人は「性無作の假色」として居られるのである。かう云ふ佛教語は何となく大變むづかしいやうに聞えるが、性無作（私が仕事をやるのでなく、天地の御陰が集つて私に仕事の出來る力を與へて下すつて居るのであると云ふこと）

假色（その力は必ず形に顯はれるものであるから「色」であるが、その形は一定不變のものでなく刻々に進展するものだから「假」であると云ふこと）と云ひ換へれば物事を値段や分量できめずに唯だ「有り難い」と云ふ氣持で、自分に與へられた力一杯にさせて貰らつて、その成績に自惚れることもなく、また逆に悲觀することもなく、グングン反省し改善すべきを改善して進展せしめ得る「心根」になつたことが性無作の假色たる「戒體」を得たことになるのである。

お授戒の目的は實にこの「戒體」を得ることにある。随つてお授戒は私達に本當の修養をすることであり、本當

の人となることである。

將來若しお授戒の機會があつたならば、是非何を措いても萬障を繰合せて參加せられんことを熱望して止まない。

小橋麟瑞監修・伊達幸太郎揮毫・

法然上人の聖像

竪一尺二寸横一尺五分 原色十度刷
精巧高級品 價 一葉 五圓

（送料共）

十年の苦心、鏤刻の結晶なる！
髻髻として上人に面接するの感あり

特製掛軸出來!!

「法然上人の聖像」を表装し、床間に掛けてそのまゝ禮拜出來る上人像です

特價 十圓 （送料共）

申込所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替 東京 八二一八七番

編輯後記

◇ 近來にない暖冬を以て冬をおくりました。都會人には冬は暖かな方が宜しいわけですが、農村の方では作物に困つてゐる所もあり、冬は寒く夏は暑い方が自然のやうです。

◇ 忙しい人には病氣が少なく、急に暇になつたりすると身體の調子を悪くする場合の多いのも、人々は常に仕事に忙殺された方が適してゐるやうです。

◇ 他からみて暇のないやうな人が反つてお念佛を申し申し暮してゐるやうに思はれることがあります。これは自分の生活に對して眞剣でもあり、熱がこもつてゐるためだらうと思ひます。

◇ 新しい生活の指導には、訓辭や宣傳ばかりでは駄目で、矢張り

信仰が基礎となつてゐることが近頃しきりに云はれて來ました。これは當然なことで、一つの節米にしても信仰心のない人には實行出來ません。

◇ ただ目先のことはかり考へてゐるのではないけません。お念佛を申す人なら何んでもないことがそれ程鑑太鼓で宣傳しなくてはならぬのさえおかしく感じます。

◇ 二月には東京深川と千葉富浦と名古屋との三ヶ所で本會誌友會が催され、三月には大阪で同じく誌友會が開かれることとなつてゐます。夫れ々々お骨折り下さる方々に厚くお禮を申し上げます。

◇ 尚「誌友會」「宗祖鐵仰の夕べ」等を催し下さる場合には、本部としても出来るだけお手傳ひさせていたゞきますから、何かと御相談下さい。

◇ 吉田絃二郎先生から寸暇を割かれて玉稿を寄せられました。

◇ 佐藤春夫先生は風邪のため床につかれてゐて間に合はず止むなく休ませていたゞきました。

◇ 石橋徳作氏から「孝は百行の基」の實話を寄せられました。

昭和十年二月三日印刷納本
昭和六年三月一日發行

それ亦同氏の経験談です。

(定價十二錢)

◇ 増谷文雄氏は近代高僧傳を連載下さいます。今尙皆さまの記憶に残る高僧を描かれるだけ興味多きを感じます。

編輯兼 眞野正順
發行人 眞野正順

◇ 新會員のための見本「淨土」はお申込次第無料贈呈をいたしますから御利用下さい。

東京市芝芝公園十五號明照會館
印刷所 赤尾光雄

◇ 廣告掲載については直接本會庶務部か東京市京橋區銀座西六正路喜社にお申込みなり、お問合せなして下さい。

發行所 法然上人鐵仰會
東京市芝芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

尙送付をお忘れなきやう願ひます

一部定價 金十二錢

◇ 本會宛お問合せには返信料同封でお願ひします。

會費 金一圓二十錢

◇ 住所變更の場合は舊住所も併せ御明記下さい。

一ヶ年 (送料不要)

「淨土」購讀規定

會費 金一圓二十錢

◇ 住所變更の場合は舊住所も併せ御明記下さい。

一ヶ年 (送料不要)

「淨土」購讀規定

會費 金一圓二十錢

◇ 住所變更の場合は舊住所も併せ御明記下さい。

一ヶ年 (送料不要)

「淨土」購讀規定

會費 金一圓二十錢

◇ 住所變更の場合は舊住所も併せ御明記下さい。

一ヶ年 (送料不要)

「淨土」購讀規定

會費 金一圓二十錢

◇ 住所變更の場合は舊住所も併せ御明記下さい。

一ヶ年 (送料不要)

「淨土」購讀規定

會費 金一圓二十錢

陸海軍 病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に二ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に六千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十萬冊以上の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

法然上人鑽仰會刊行圖書（一部）

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村 辨康 著

（四六版一三〇頁總ルビ付）

法然上人の信仰生活

定價 三十錢
送料 六錢

中村 辨康 著

（四六版八〇頁總ルビ付）

信仰讀本

定價 二十錢
送料 三錢

藤井 實應 編

（菊半截一四四頁總ルビ付）

法然上人法語抄

定價 三十錢
送料 六錢

佐藤 春夫 著

特製ノート型、天金
十二ボ総ルビ、三〇〇頁

法然上人掬水譚

定價 四圓五十錢
送料 二十二錢

◇御注文には小爲替または送金と通信とを兼ねた振替利用が御便利です。

◇送料をお忘れなきやう願ひます。

◇端書での御注文はお断り致します。

上人が萬人と共に悩み求められた信仰求道の生活を軸としそれを廻る時代の種々相を描いて何人にも納得の行くやうに親切丁寧な説かれてゐる。一讀信仰の眞隨にふれよ！

非常時局下、人心の確固たる統一を期する時、一道の光明燦然として信仰の正道を指し示す。萬人のための宗教、淨土教の信仰を説くこの書こそ現代人が信仰の書。

信仰の珠玉凝つて一卷をなす。浩瀚なる上人御遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んで句々金玉の聖句、これぞ生活の根底である。

大毎、東日兩紙に連載し百萬讀者を魅了した當代隨一の宗教文學、高き藝術の香氣と深き信仰の把持、小杉放菴畫伯の氣品高き挿畫と相まつて一大美術品！

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年二月廿日印刷納本 昭和十六年三月一日發行

淨土第七卷 第三號

（停）

定價 金十二錢
（送料五圓）
外埠定價 金十三錢